



始



324
684

增訂
佛教の根本思想

大内青巒著

324-681



佛
教
五
經
卷
之
四
第
三
編

大正
4. 1. 28
内交

自序

書肆某この小冊子を袖にし來り、余に眎して曰く佛教の根本思想印刷なれり、請ふ一言を題せよ、余曰く是の法は平等無相、強て名けて佛教と謂ふ業に已に謬れり、何の根本と説き枝末と論ずべきものあらんや、見よ彼の天際日上り月下る、是れ呼て佛教と做さんか、將た外道と做さんか、檻前山高く水寒し、知らず孰れか是れ根本にして孰れか是れ枝末なる、何者の痴漢ぞ風なきに波を起して、妄想閑語慚愧を知らず、名けて佛教の根本思想と謂ふ、何ぞ世を欺き人を慢するの甚き、子また從て之を印刷公行せんとする、抑も何の意ぞや、主人失笑して曰く此れは是れ先生かつて自ら貴著信行綱領を講演したまふところ、學生

等筆記して篋中に藏すること久し、之を名けて佛教の根本思想と謂ひ、咄堂居士の校訂を請て、印刷公行する、皆先生かつて聽許したまふところに非ずや、先生何ぞ健忘の甚きや、余曰く噫其れ然るか、子等胥謀りて家醜を外に掲ぐることを作す、咄々内賊防ぎ難きを如何せん

戊申歲首

藹々青巒自題

題言

信行綱領は我が大内青巒先生の所撰にして、諸佛の垂教各宗の歸趣も亦た之に過ぎたるはなき大乘佛教の根本思想たり、予教を先生に受くること二十年、探真に疑あれば之を三信に解き、修善に難あれば之を三行に問ひ、森茫たる佛海常に之によつて其の南針を得たり、然かも三信三行文簡にして義深く、解説縦横なるにあらずんば其の旨を得難し、先生曩きに東京慈惠會醫院醫學専門學校生徒のために之を説く、前後八時間、叮嚀反覆、略ぼ其の大綱を悉す、其の筆記も亦た要を得て頗る後進を啓發するに足る、予一讀、江湖に推薦するの念禁ずる能はず、書肆を懇通して之を刊行せしめ、讀者をして居ながら先生の雄辯を聴くの感あらしめんとす、故に速記者の誤謬と認むべきの外は敢て一字を増減せず、編輯校訂の責一に予にあり、讀者請ふ累を先生に及ぼすなかれ

加藤咄堂識

增補 佛教の根本思想目次

第一章 緒言

近頃の思潮……………經典の浩濶……………應病與藥……………冷暖自知……………
 宗派の分裂……………佛教の渡來……………三寶の興隆……………日本佛法と
 支那佛法……………忠孝と佛法……………日本佛法の特色……………平安朝
 の佛教……………天台……………真言……………時代の變遷……………源平時代
 ……死の覺悟……………淨土……………禪……………佛教各宗……………釋尊
 の說法……………話の價值……………如是我聞……………經典の翻譯……………
 翻譯の法規……………五種不翻……………翻譯難……………梵漢兼舉……………
 根本思想

第二章 佛教の原理

信と行……………佛教の所詮……………信と疑……………疑の根本……………生死の問題……………

易……太極……神……佛儒耶の三教……本體と現相……生死の
 關……因縁果報……汎神教……宇宙の妙用……萬物相關
 ……第一の信……天地は萬物の逆旅……空間の無限……
 時間の無限……絶對……不變……靈光……佛の觀念……
 第二の信……活動……因縁相續……果報……第三の信
 ……本願……本德……用と處……感應……差別即平等
 ……佛教の特色

第三章 佛教の實踐

三信の梗概……現相即本體……三行……善惡の標準……
 自利利他……佛教道德の要義……人間本位……善惡の定解
 ……佛性……法性……天稟の本性……善惡と迷悟……
 別々解脱戒……規則の支配……戒……妙運律師の事……三
 聚淨戒……佛教信徒の憲法……止惡轉迷……受戒……大
 乘戒と小乘戒……修善開悟……濟衆救世

第四章 信行の要解

信と行……撫象……信は高遠行は卑近……實行の必要……
 佛と一致……佛身世界に滿つ……乾屎橛……法身……
 菩提の坐……佛教各宗と三信……四個大乘……道德行爲の
 極致……佛法の大意……佛教各宗と三行……斷德波羅蜜
 ……智德波羅蜜……禪定……念佛題目誦呪……恩德波
 羅蜜……四攝法……三施……法施……愛語……利行
 ……同事……四恩……諸佛の大戒……救世の事業

補増 佛教の根本思想目次

信行綱領

方今眞理を愛し道徳を重んずるの士女佛敎を講究し且つ履踐せんと欲する者頗ぶる多し然れども經典の浩瀚なる教義の高尙複雑なる各宗派の途轍多岐なる言論辭句の世間に異なれる等一再これを見聞するも遽かに其の津梁を得ること能はず茫然として路傍に躊躇する者滔々皆是れなり予また固陋寡聞一も得るところなし然れども夙に久しく佛海に游泳し聊か水波の性情を蠡測するところなきに非ず嘗て竊かに諸佛垂敎の原則を探り諸祖化導の洪範を尋ね爰に三信三行を撰みて以て吾人在家の者の佛敎を信じ且つ行ふ普通の標準と作す蓋し三信は大乗の通義にして吾人眞理を講究するの原則

三行は菩薩の要路にして吾人道德を履踐するの洪範なり而して各宗派の歸趣また此に外ならず庶幾くは天下同感の紳士淑女この標準に依て以て眞理を講究し且つ道德を履踐するときは則ち佛教を信じ且つ行ふの能事畢ると謂ふべし、

三 信

吾人は無限の空間に充塞し無限の時間を通貫して宇宙平等の本體たる絶對不變の靈光あることを確信す
吾人は宇宙平等の本體活動して萬象差別の現相となり因縁相續して世界の果報歴然たることを

確信す

吾人は萬象の妙用各其の本徳を全うして互に相感應するときは即ち差別の現相直に是れ平等の本體たることを確信す

三 行

吾人は凡そ止惡轉迷の規律皆誓て之を實行す
吾人は凡そ修善開悟の道法皆誓て之を實行す
吾人は凡そ濟衆救世の事業皆誓て之を實行す

右三信三行要を以て之を言はゞ自ら心に信ずるところこれを身に行ふ其の信は尤も高遠なるべく其の行は却

て卑近を要す、蓋し卑近の履踐を以て之を高遠の講究に
 照し、而して慚るところなく、高遠の眞理を以て之を卑近
 の道徳に應じ、而して樂むところあらば、乃ち吾人信行の
 要ほとんど盡きぬ、夫れ三信は是れ本體平等、現相差別妙
 用感應の觀念、便ち吾人智識の妙計、經に謂ゆる佛身法界
 に充滿して普ねく一切群生の前に現ず、緣に隨ひ感に赴
 きて周ねからざることを無く、而かも常に此の菩提座に處
 すと是れなり、其の他諸經論に眞如法性佛陀本覺涅槃等
 と曰ふ者、皆本體の謂なり、諸法緣起衆生不覺生死等と曰
 ふ者、皆現相の謂なり、不二融即感應始覺解脫等と曰ふ者
 皆妙用の謂なり、華嚴宗の眞空事理周偏天台宗の空假中
 眞言宗の六大四曼三密禪宗の正偏回互等皆悉く體相用の
 通義に出る者なし、大なる哉、三信の法門や、又夫れ三行

は、止惡修善、濟衆の運爲、便ち吾人徳行の極致、經に謂ゆる
 諸惡は作す莫れ、諸善は奉行せよ、自ら其の意を淨くす、是
 れ諸佛の教と是れなり、其の他諸經論に攝律儀戒と曰ひ
 斷徳波羅蜜と曰ふ、皆止惡の謂なり、五戒十善等の一切律
 義及び世間の防非斥邪諸法律等皆此の中に攝む、攝善法
 戒と曰ひ、智徳波羅蜜と曰ふ、皆修善の謂なり、忍辱精進禪
 定念佛唱題誦咒等及び世間舞倫の教誨皆此の中に攝む、
 攝衆生戒と曰ひ、恩徳波羅蜜と曰ふ、皆濟衆の謂なり、布施
 愛語利行同事の四恩八福田等及び世間博愛慈善の事業
 皆此の中に攝む、蓋し惟みるに三聚淨戒は是れ諸佛の大
 戒、三徳波羅蜜は即ち三身の妙用なり、然らば則ち吾人且
 夕履踐するところ、是れ諸佛の大戒なり、是れ三身の妙用
 なり、諸佛の大戒を受持し、三身の妙用を發揮する者、是れ

信行綱領

佛身のみ、吾人復た凡夫に非ざるなり、經に曰く或は一念
を起して我は是れ凡夫なりと言は、三世佛を謗るに同
じく法中に重罪を結すと、吾人豈自重せざるべけんや、
勉せざるべけんや、

明治二十四年一月二十三日

藹々居士 撰

三信

妙用	現相	本體
不二	諸法	眞如
融即	緣起	法性
感應	衆生	佛陀
始覺	不覺	本覺
解脫	生死	涅槃
周偏	事理	眞空
中	假	空
三密	四曼	六大
回互	偏	正

三行

濟衆	修善	止惡
攝衆生戒	攝善法戒	攝律儀戒
恩德	智德	斷德
應身	報身	法身

三信三行

増補 佛教の根本思想

藹々居士 大内青巒 講述

第壹章 緒言

明治二十四年の春でありました東京帝國大學第一高等學校早稻田大學慶應義塾等に在學の學生中で佛教研究に心ざしある人だちが聯合して日本佛教青年會を組織するに就て其の最初に佛教の根本思想を從來の各宗各派に拘はらず又其の各宗各派と衝突しない程度に於て尤も初心の人にも解り易いやうに話してくれぬかといふ請求があつた其の時に拙者が常

に自から信じて居り且つ幾分なりとも自から實行しつゝある要點に就て、
 信行綱領と題する極めて簡單なる條項を撰述し、それを印刷して諸氏の手に
 渡して置いて、さうして更に其の大意を講話致したことであつたが今度
 當慈惠専門學校に於て明德會を組織せられ生徒全員すなはち諸君が其の
 會員として、佛教主義に道德の修養をせられるに就ては、其の講師を校長高
 木博士から拙者へも囑託せられたのである。就ては追々種々な御話を致す
 ことでありませうが、先づ第一最初に此の信行綱領に據て、拙者が佛教の根
 本問題であると信じて居るところから御話しやうと思ふのであります。乃
 ち諸君の御手元へあげて置いた信行綱領と題する小冊子の文句に就ての御
 話であります。が到底之を委しく講話するといふことは、中々五席や八席に
 及びもないことでありませうから極めて大要のところを簡略に述べるに過
 ぎぬのであります。さて此の小冊子に記してあるところの文句が大體三段
 に分れて居りまして、第一段は此の信行綱領を撰述いたすに及んだ理由の

緒言であり、第二段が即ち其の本文で三信と三行との二節に分れ僅に百數
 十字に過ぎませんけれども、佛教全體謂ゆる八萬四千の法門も只此の百數
 十言に過ぎないと自分は深く信じて居るのであります。又其の次の一段に
 此の本文の説明を兼ねた附言であります。其の中に本據とすべきところ
 の經文の言葉などを一二引いてあります。其の分は最後に聊か其の文
 句の順を追つて御話をすることに致しませう。そこで先づ第一段の緒言で
 あります。之を一々文句に當つて話してゐると非常に長くなる恐れがあ
 ります。から其の大略のところをザツと述べておかうと思ひます。一體近頃
 になりまして大分宇宙の眞理とか人生の歸趣とかいふことの研究が盛ん
 になつた様子であります。が其の研究した眞理を我々の朝な夕な道德の
 上に實踐躬行することになりませう。これは是非宗教の範圍に這入らねば
 なりません。これらの問題の研究は哲學者の職分でありませう。哲學者はあ
 まり實踐といふことに重きを置かず却て哲學といふものは道理を研究す

るに止るもので之を實行しやうといふのではないとまで斷言する學者もあるほどでありますから其の眞理を道徳に應用して行くといふことになると必ず宗教の方に向はねばならぬこととなります其の宗教といふ中にも基督教もあれば佛教もあり其の他種々の宗教もございませうが今は其の中の佛教によつて眞理を愛し道徳を重んずる人々のために其の根本思想をお話いたさうと思ふのであります。

然るに佛教と申すものは經典の浩瀚なる教義の高尙複雑なる各宗派の途轍多岐なる言論辭句の世間に異れる等彼の耶蘇教などの如く極めて單純な平易なものとは違ひまして耶蘇教の方で見ますとバイブルといふ誠に簡單なもので袂の中へても入れて置けるほど小さい本でありますから研究し易いはずですがそれすら神學といふ學問の上から見ると非常に六かしいことゝ承つて居ります然るに佛教の方の側は之を研究することになりますと大層困難なことが幾つも起つてくる其の中の第一の困難は佛教

の經文即ちバイブルの如きもの釋迦如來の説かれましたところの教でありますけれどもそれは非常に浩瀚であつて一口に五千四十八卷の經文と申すものであります五千四十八卷と申した中には釋迦如來の説かれたものばかりでなく後の人の書かれたものも註釋をしたものも加はつて居りますけれども今より千年以前唐の玄宗皇帝の時代に出來た目錄に載せられたのばかりでも已に五千四十八卷といふのでありますそれで今に一切經と申したり又大藏經と申したりするものを一口に五千四十八卷といふのであります書物の數が多いばかりでなく其の中に説き置かれて居る教義即ち教の意味合が非常に高尙にして且つ複雑でありますどういふ風に複雑かといふに基督と申す人は僅に三年の間の布教であつたと承はるがそれですら學問として謂ゆる神學の側から研究するのには一通りのことでは無いさうであります今我が釋迦如來の説法と申しますものは五十年の長い年月に亘り三十の年から八十歳までの教化でありますから其の五

佛敎の根本思想
 十年の間には幾ら釋迦如來のやうな御方でありましても、三十頃と七十後
 とては餘程又御自身の見識の上にも違ひがあつたてありませう、そのみ
 ならずして其の敎を受けるところの弟子達の考が又段々と進んでも來る
 のてあります、それで釋迦如來自ら言はれた言葉にも、應病與藥恰ど御醫者
 様が病人を診察して、其の病氣次第で藥を與へるやうなものであると
 「心地觀經」には言はれてあるが、更に或る場合には我は良醫の病を知りて藥
 を説くが如しといふ言葉も、遺教經に説いてあります、所謂應病與藥、其の病
 が千差萬別でありますから、自然其の藥も千差萬別であります、たとへ其の
 原料は同じとしても、用方が違ふといふやうな工合になつて來ます、其の五
 十年間の説法が或る時は宇宙萬象を今日の學者の言葉で申せば、宇宙觀の
 上から説明せらるゝところもある、又或る場合には、人生觀の上から説明せ
 られる、時によれば平等といふ意味からも説明せられ、或る場合には差別と
 いふ方から説明をされる、かと思へば平等の外に差別がない差別の外に平

等は無いと兩方を圓融會通して説かれることもある、それで御經の數は多
 く説いてある説は複雑になつて居つて、結局非常に高尙幽玄なものになつ
 て、遂には不可思議不可説不可稱量、心て考へてみることも口で説くことも
 出來ない、況んや其の數量を勘定してみるといふことは無論出來ぬことに
 なる、さうなれば已むを得ずして一黙黙つて仕舞うより外に仕方が無い、總
 て物事は其の極點に至りますれば、冷暖自知、暖いと冷たいとかいふこと
 は人から講釋して貰つて解るものには無い、自ら暖い目に逢ひ冷たい經驗
 をした後、に成るほど是は暖いこれは冷たいといふことを自分で合點する
 より外仕方がない、物事が理屈の上でよく分つて居りましても、其の場合に
 臨んで自らいふには、いはれぬ味が起つて來て、獨り膝を打つてニコリと笑ふ
 やうなことが出來て來ませなければ、まだ本當に自分のものに成つたので
 はありませぬ、さういふ時には一黙といふて無言で居るといふことであり
 ます、たゞ口で言ふことが出來ぬけれども、互ひに其の得心の入つた人と

入つた人としては顔を見合せた間にも感應道交て互にニコリと笑うて意味が通ずるといふことが世俗の總ての事の上にもあることであります。さういふところまでゆくには科學や哲學の有りふれたものではない。宇宙の眞物萬物の本體の上に於て、そこまでゆくのでありますから、非常に高尚なことになつて來るのであります。然るにそれをチヨイと早解りに佛法を知つてみたい、聽いてみたいといふ位のこと、解るの解らないのと相場の附くものでは無いのであります。在郷の百姓の處へ行つて御前方は何が職業であるか、米を作ります、どうして米を作るといふやうなことを、まる／＼米などを拜んだこともないやうな野蠻人か何か、出掛けて來てそんなことを訊かれたら百姓が説明しやうとしても出來るはずのものでは無い、米といふものはどんな物か知らぬけれども作ることを教へて呉れとか、或は百姓が養蠶をするのを見て、それが三十分間聞いて分らないとかいふやうな注文は出來るわけのものでは無い、ところが今日の人達が物好半分、チ

ヨイと基督教の説教一席聽いたけれども、餘り感服しないとか、御寺へ行つて坊さんの法話を聞いたが根つから分らないことを言つてたとか、いふやうなこと、詰り餘り面白くもないからそれより寄席へても行かうかといふやうな考になる有様、それでは所詮解るものでないことは無論であります。それで佛教を研究しやうといふ志を起した人であつても、チヨツと手が附かなくなつてくる。加之我が日本に今日弘まつてゐるところの佛法と申すものは、宗旨の数が十三やらあるさうです。それが又一宗の中で幾つにも派が分れて、眞宗だの禪宗だの日蓮宗だのといふ宗旨になりますと、何れも各々十派づゝにも分れて居ります。何故にさう分れたかといふと、皆それ／＼理由があるので、全く各々少しづゝ違ひがありますが、其の差を互ひに頑固に守つて居るといふことになるので、御座いますから、之を一口に言つてみれば、聖道門淨土門、自力門、他力門など、分れてゐて、其の中で誰も彼もよく知つて居る法華と念佛といふ側になると、實に早や根本的に品物

ても遠くやうな工合世の悪口にさへ

夕立や法華かけ込む阿彌陀堂

夕立に降られて、據なく阿彌陀堂へ法華宗の坊さんが駆け込んだのが不思議にいはれてゐる位な話で、嫁を貰ふにさへも宗旨の間の議論があつて、好い口と思へば宗旨氣に入らず

といふ川柳があります、聲に行つても嫁に貰つても誠に好い縁談だと思ふけれども、宗旨が違ふので困るといふほどに同じ佛法の中にも異宗派といふものは仲の悪いものであります、どうしてさう分れたのかといふと、多くは皆道理の上、教義の意味合の上から分れて居りますので、一つは時間的に歴史の上から研究せんければならぬことも起つてきますが、先づ天竺や支那の話はお預りとして、我が日本に渡つてからのところを極めてザツと考へてみますと、奈良朝の昔は申すまでもありません、奈良朝といへば元明元正以後をいふのでありますけれども、私が今申すのは奈良朝以前に溯つて

初めて日本に佛法の参りましたのは、欽明天皇の朝であるといひ、雄略天皇の時であるといひ、又繼體天皇であるとの異説はありますけれども、要するところ佛法が日本の宗教となつて、公然天皇の詔を以て御弘めになりましたのは、推古天皇の二年であります。

それまでのところに佛敎はあつたてもありません、我々の先祖達が私かに信じたゞけてあつて、天皇の詔を以て之を天下に弘められたのは、推古天皇の二年、日本紀を御覽になれば明かに記されてあります、即ち推古天皇の二年春二月丙寅朔、皇太子及大臣に勅して三寶を興隆せしむとあります、此の時始めて天子の詔を以て佛法を我が日本に弘められたのであります、其の後さらに十年を経て推古天皇の十二年、我が國に始めて憲法を發布せられました、我が國のみならず世界萬國の間にも凡そ憲法と名けられるものゝ尤も古いものは、此の推古朝の憲法であらうと思ひます、其の内容は今の世の憲法とは大に其の體裁が違ふて居りますけれども、要するとこ

ろは國家を經綸するの根本基礎を定められたものであることは其の按を
 同じうして居ります、殊に其の憲法の第十七條に「大事は必ず衆とともに之
 を論ぜよ獨斷すべからず」と規定せられてあるが如きは全く今日の代議政
 體の基礎を千三百年前の昔に建て、置かれたものとも謂ふべきでありま
 す、是の如く國家千載の基礎を定め萬機經綸の根本を固められたる憲法の
 第二條に於ては明かに此の佛教の事を宣誥せられて「篤く三寶を敬せよ三
 寶とは佛と法と僧となり四生の終歸萬化の極宗何の世何の人か此の法を
 貴ばざらんや云々と公示せられてある即ち我が國の佛教は最初から國家
 經綸の基礎として弘められたものであるといふことを忘れないやうにせ
 んければならぬのであります、其の後我々下々の民百姓の家々までも佛壇
 を安置するやうになつたのも、其の初め自今民家に佛像經卷を安置して禮
 拜供養せしめよといふ詔に本づいたのであります、是に至つて佛法は上
 天皇陛下より下庶人に至るまで上下共々國家のために我々が信じ且つ行

はねばならぬことになつたのであります、それから降つて光仁天皇までが
 奈良朝といふので、其の頃日本に弘まつて居つた宗教は南都の古宗、それは
 六宗と申して六つあります、即ち俱舍宗、成實宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、律宗の
 六つであります、然るに光仁天皇から桓武天皇の御代になりました、御承知
 の通り總ての上に御改革があつた、即ち政治上の大改革があつて唯今の京
 都(平安)に都を御遷しになつたのである、近くは明治の御維新にも劣らぬほ
 どの御改革のために天下の形勢がコロリ一變したのであります、其の結果
 宗教と申しますものも自然變らなければならぬことになつた、元來我が日
 本の佛教と申すものは最初から國家と密接な關係を持つたものでありま
 すから、國家の改革があると同時に宗教の改革が起らねばならぬことにな
 つてきた、支那や天竺に於ては佛教といふものが國家と關係が無い、却つて
 國家とは甚だ仲の悪い位のものであつた、一例を申しますと支那に於きま
 して念佛を一番最初に弘めた人は廬山の慧遠といふ法師であります、此の

人の時は六朝の頃でありますけれども、一體に坊さん達が出家をする時は君父に暇を告げる親にも君にも必ず御暇乞をして世の中を捨て、仕舞ふ、即ち君に對しては臣として事へない親に對しても子として事へないといふ人間外れになつて仕舞ふのが當然であります、そこで坊さん達が天子に向つても敬禮をせぬ、天子でも乞食の見ても平等に見るといふのでありますから、天子様だからとて別に敬禮はせぬ、すると天子は坊主共が増長をして朕に對して御辭儀もせぬといふは怪しからぬとても考へたと見え、坊主と雖も天子に向つたならば必ず敬禮を致すやうにといふ勅令を出したものと見える、さうすると此の廬山の慧遠といふ人は沙門不敬王者論といふものを書いた、今日だつたらそれこそ大變である、チヨツと新聞や何かに筆が滑つてさへ不敬罪に問はれるが然るに慧遠は公然と沙門は王者を敬せざるの論を書いて天子に差し出した、即ち出家であるから天子と雖も敬禮などをすべきものではない、沙門は普通の人間では御座らぬといふ議論を

堂々と書いた、到頭天子が屈服して已むを得ぬに依りそれならば坊さんの勝手にさせてあげといふことになつたのであります、これは只其一例をいふのであります、けれども支那に於きましては佛教といふものと國家といふものとは少しも關係が無い位ではない、或る場合には仲が悪かつたといふはなければなりませぬ、即ち三武の厄と申して佛教は天子のために三度廢滅せられた歴史もあります、然るに日本の佛法はそれとは違ひまして最初から前申した如く勅して三寶を興隆せしむといふ天子の詔を以て國のため弘められた都合になつて居ります、それで日本紀には其の三寶を興隆せしむとある言葉の下に、是の時臣連等が君と親との恩の爲に競ふて佛舎を造る之を名けて寺といふとあります、天皇の勅命を以て佛法を御弘めなされることになつたに就て御役人達が君と親との御恩の爲に競ふて寺を造つたのである、一體に寺といふものは何の爲に出来たかと申せば、君の御恩の爲め、親の御恩の爲めに出来たので、其の君の恩といふは忠義といふこと、

親の恩といふは孝行といふことであるは申すまでも無い彼の俗に謂ゆる教育の勅語は何が本になつて居るかといへば即ち忠孝が本になつて居る我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す日本の國體の精華である教育の淵源であるぞとまで仰せられたといふは何であるかといへば上に在ては我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なりといふ天皇陛下御代々の洪徳下にあつては臣民が克く忠に克く孝に世々厥の美を濟すこれが國體の精華であるぞ教育の淵源であるぞと御示しになつたのであります即ち忠義孝行のために始まつた教育であるといふことが分つたならば日本の佛教が親や君の爲に弘まつたものであるといふことは明かであります是に至つて我が日本の佛教は支那天竺の佛教と根本的に其の弘通の性質が違つて居り何處までも國體の精華教育の淵源と密着して弘まつたのでありますから其の國の政治が違ふて來ますれば從つ

日本佛教の特色

平安朝の佛教

て宗教の變化も起らなければなりませぬ即ち桓武天皇が唯今の京都平安城へ都を御遷し遊ばされて政治法律其の他總ての上に御改革があると同じ時に以前の六つの古い宗旨は一口に言へば御用に立たなくなつてこゝに新たに起つた宗旨が二つあるそれは古宗の中の法相宗の坊さんであつて、桓武天皇とどういふ御約束があつたものか偶然であつたかも知れませぬけれども桓武天皇の御遷都と同時に自分の宗旨をさらりと捨て、しまひ、而して新たな宗旨を興した其の人は最澄といふ方でありすが元來此の人に桓武天皇が御遷都になる九年前に唯今の京都と大津の間の比叡山を御建てになつたほどであの邊は當時猪や猿の棲んで居たところて今日でも京都から登つても江州から上つても五十町程の間は駕籠も車も利かぬやうな險阻なところて其の山の上へ寺を建てられたのであります其の開堂式の日には奈良から桓武天皇は親しく御臨幸に成つて居ります其の頃まだ世間でも都を御遷しになるであらうなどとは思ふてゐない時分であり

ます、さて其の最澄の弘めた宗旨は元の法相宗とは非常に程度が違ひ殆んど大學と中學位の差はたしかにあります、それでありますから、最澄といふ人が法相宗から出て、そこまで及んだといふものは進歩といはゞ言ふやうなものゝ、總て宗教の信仰は非常に守舊的頑固なもので、自分が今まで信じて此上もないと思つてゐたものを捨て、新たな宗旨を自分で弘めるといふことは、一口に言ふと法相宗の方から見れば謀反人でありますけれども、元の法相宗ではとても桓武天皇以後の國家を導くといふことは覺束ないといふことを能く得心せられて、此に天台宗といふ新しい宗旨を弘められたのであります、此の人が比叡山の開山で天台宗の高祖後に傳教大師と諡のある御方であります、ところがこれと同時に三論宗の方からも一人謀反人が出た三論宗といふ宗旨は成り立たなくなるほどに異つた宗旨を弘めた人は空海であります、これは後に弘法大師と諡のあつた人で、此の人の宗旨は眞言宗であります、眞言宗といふものゝ道理が明かに立つて來て之

天台宗

眞言宗

時代の變遷

を信ずる人が多くなると元の宗旨の三論宗は潰れてしまひます、潰れてしまふけれども其れに拘はらずして空海は即ち眞言宗を弘められました、此のお方は桓武天皇ではなくて桓武天皇のためには御子であります、其の間に御代で申しますれば平城天皇が御孫にあたる嵯峨天皇が空海即ち弘法大師を御保護遊ばされて眞言宗といふ宗旨が出來た、茲に至つて彼の奈良時代の六宗が多く此の眞言天台に變りました、此の事實としまして今日現在日本國中にあります寺々其の最も古い寺へ行つて見ますると一例を申せば日光の満願寺の如きあの寺は即ち奈良の古宗の中の法相宗の人で勝道上人が開いた、然るに其の後桓武天皇以後には天台宗といふ宗旨になつてしまつたといふやうに、平安朝の國家の變りと同時に昔の宗旨は潰れてしまつて天台眞言の世となつてしまふたのである、これから凡そ四百年ほどの間は御承知の如く王朝時代、此の王朝時代に於ては大なる變化はない、矢張り眞言天台の盛んな時代であります、然るに更に四百年

經ちますと保元の亂平治の亂續いては源平の亂遂に鎌倉へ頼朝が幕府を開き實に天下の大變これより甚しきは無かつた今更それを繰り返して申すまでも無い初めて天皇陛下の大權は下に移つたのであります天子は京都へ押籠め隠居同様八百年來名義ばかりは一天萬乘の君として其の實は率士の濱王土に非ざるなしといふことは昔ばなしになつて僅かに十萬石の捨扶持をお貰ひなされて御座つたといふことは諸君は實地に見聞はなさらぬてありませうけれども我々は御維新前からの様子を知つて居りますから如何にも恐れ入つて御氣の毒に思つてゐたそれが遂に勤王の議論の起つた原因でありますがさういふ大變化が鎌倉時代に起つたのである斯うなつて見ますと天台眞言といふ王朝時代の宗旨が鎌倉以後の人を化導することは覺束なくなつた極端にいへば役に立たなくなつた其の所由はいろく御座いませうが一つは天台眞言と申します宗旨はどちらから見ましても非常に學問が要るのであります學問が要りますから學者では

菅原道真大江匡房などいふ大學者達は皆眞言天台の學問をして其の學問の上から安心立命を定め立派な佛敎信者であつたらしいのであります即ち上は天子より下は公卿達の間だけには眞言天台といふものが盛んに行はれた然るに世の中は公卿の手を離れて鎌倉武士といふ兵隊の手に渡つてきた其の兵隊達は何てあるかといひますと無學文盲な者であります頼朝といふ人が學者でもなければ義經も學者ではない何が豪かつたかといへば人殺しが上手であつた人殺しの方に至つては今日でも軍人などが理想とされて居る豪い人々でありませうけれども天台の學問眞言の學問といふものはさういふ人達に解るものではない況んや其の境遇はどんなかといふと保元平治以來の國亂といふものは我が日本の歴史のみならず世界萬國の歴史の上にあのやうな淺ましい殘酷な戦は殆んどないと申すこととあります保元の亂にしましても平治の亂にしましても申すも恐れ入つたことながら天子様方の兄弟喧嘩其の又御手傳ひをして戦ふた人

達が親子兄弟相屠るといふ有様で、現に頼朝の親の義朝は實父の六條判官爲義の首を切つたといふことである。斯様に亂脈な世の中になると、さすがに淺ましいことである。考へ及ぶ時もありませう。近く彼の日露戦争の當時に於ても、戦地へ行つて戦ふた將校から日々、のやうによく私共の處へも書面などが參つて内地に居る時には幾ら勸めても佛敎などは見返りもしなかつたやうな荒くれ男が戦地へ向つてからは何ぞ自分達にも解るやうな佛敎の書物を送つて呉れないかといふやうなことを云つてくる。是は戦地にある間は敢て生命が惜しいわけては無い。即ち死ぬことは覺悟して居る。死ぬるといふ覺悟は或る場合に至ります。裏店の夫婦喧嘩にもある。裏店の譯のわからぬ亭主と女房が喧嘩をして、摺鉢と摺木でやりあつて摺鉢が叩き壊されると、口惜しい残念だというて飛び出したはづみに、井戸の中へドボンと這入つて死んで仕舞つた。それが即ち死は鴻毛より輕しといふことになり、或るほど死ぬといふことは鴻毛より輕いに違ひない。違

ひはないけれども、眞に覺悟したといふものではない。謂ゆる合理的に死ぬことが平氣になつたのでは無い。更にもつと死ぬことが平氣になるのが狂人である。巢鴨の病院あたりへ行つて見ると、死ぬことを平氣な連中は幾らも居る。それと同じ様に戦に出てゐて鐵砲玉がヒュー／＼来る。肉弾がバラバラと散る場合になつてからは、命を惜んでも惜まるゝもので無く、生きたいと言つても生きたるゝものでもない。斯ういふ時になつたら仕方が無い。運に任せるといふやうな考も起るもので無い。殆ど狂人になつて居る。其の間立つて緯々として餘裕があるといふ見識の立つといふことは、何か此に一つ確かに謂ゆる安心といふものがなければならぬ。さういふ場合になつてくると哲學の研究で宇宙の眞理は解るかも知れませぬ。即ち生あるものは必ず死に歸するといふ理屈は解りませう。然し道理が解つたらお前さん一つやつて見なさいといはれては、御免を蒙るといふより外はないことになる。それ故に奮闘して死に就くは易い。即ち決闘して死ぬことは容易で

揮つたりして戦ふ人々が目的では無い、女人正機、惡人正機と申して極めて
 機根の劣つた者を主意とせられたのでありますから、一向専念に南無阿彌
 陀佛を弘められた一方は坐禪をすることを弘められ、片方は念佛を申され
 た此の念佛を申すにも格別智慧も學問も要らぬので、唯々往生極樂のため
 には南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひ取る外に別の仔細候
 はず……斯ういふ風に教へたのが法然上人であります、是等が皆天台眞言
 といふ學問を振り捨て、仕舞うて新しく鎌倉以後の無學文盲な武士を救
 ふが爲に起つたものであります、王朝の時代になか／＼六かしかつた天台
 や眞言とは全く性質が違つて居る、それで天台眞言の御寺達が鎌倉以後に
 なつて淨土門と禪宗とに轉宗して仕舞つたものが大層多くなつたのであ
 ります、今日になりますと、天台宗の数が日本中で三千位しかない、昔盛んな
 時には比叡山だけで三千の坊舎といふのであります、が現在は日本中で
 僅か三千位になつたといふのは皆淨土宗や禪宗に變つたのであります、そ

れ故に今日全國到處最も盛んに行はれてゐる佛法は禪と淨土ばかりで
 あります、其の中で法然上人の門下から親鸞上人が出て、これが眞宗の高祖
 となり、此の寺ばかりが其の數二萬もある、これに淨土宗と時宗とを加へれ
 ば三萬ヶ寺であります、日本中の寺の數が七萬ヶ寺の中三萬ヶ寺は南無阿
 彌陀佛、其の他は臨濟、曹洞、黃檗の禪宗三派で二萬以上ありますから、淨土
 門と禪宗ばかりで早や五萬ヶ寺餘り取つて居る、あとに残つたのが眞言宗
 や天台宗や日蓮宗といふ割になります、つまり時勢に應じていろ／＼な宗
 旨が開けて來たのでありますから、これが何時でも同じといふわけにはゆ
 かね、諸君の中にも此の王朝時代に盛んであつた眞言や天台に縁があつて、
 其の方の道理からゆけば解り宜い人もあります、又さうてはなくして矢
 張り妙なものて遺傳といふこともあり、ありますから、自分の生れた家とか或は
 母親とかが禪宗か眞宗で父親が日蓮宗の信者であるとかいふやうなこと
 から何となく御題目が貴く思はれたり、又は自分で信じて居らぬまでも念

佛が尊いやうな感じのある人もありませう、さういふ人は矢張り遺傳なり何なりそれ／＼從來多少とも縁のあるところから解りよいといふこともある。然るに念佛の話を聞いて見ると、念佛の外には佛法が無いやうになつて外の宗旨では悟りも開けず佛にもなれぬ、どうしても我が宗旨に限るといふたやうなわけ、今度は法華へ行くと法華の外は佛法でないやうにいうて居る有様、さりながら今諸君の如きは佛敎専門の僧侶となるのではない、諸君は別に専門の仕事があつて其の餘暇に佛敎の話を聞いて見やうといふのであるから、そんな六かしいところまでゆく必要はない、よし志があつても非常な困難を感ずるといふことになつてくる、乃ち佛敎を研究したい志があつても仕悪いといふことがこれにて三つになつた、一つは經文が多過ぎる、二つには敎の意味合が甚だ高尙で複雑である、もう一つは専門の御寺さん達に聞いて見やうと思へば宗旨が澤山あつてどれが本當だか解らぬことになる、更に此の上で起つてくるのに何かといふと言葉が違ふのであ

る世間の文と佛敎の言草といふものは言葉が同じでも文字が一つでも意味がさう違つて居ることが多い、總て専門語と申すものはさういふものでありますけれども、就中此の佛敎は言葉が違ふばかりでなくて、讀方の音まで違つてゐる、これ亦た佛敎を研究する上に甚だ困難を感ずることになるのであります、此のことに就ては少し話が深入りし過ぎるやうであります、すけれども、一體に經文即ち釋迦如來の御説きになつた書物といふものは最初のところは唯釋迦如來の御話だけで、謂ゆる演説のみであります、此の演説だけといふことに就ては、又話が枝葉になるやうでありますけれども、總て大聖人の敎と申すものは、文章を以て成立つたものは無いやうで、其の一例をいへば基督教と申すものは、耶穌といふ人が筆を執つて自身書き遺したといふものは一字も無い、悉く皆耶穌が口で話されたのを弟子達が耳で聞いて居つたのであります、其の後保羅を始め、其他の人達が筆にあらはしたのが今日のバイブルだといふことであります、儒敎とても同じ

やうて孔子の著述と申すものは、序易象繫象說卦文言とありますから、易のことに就ては多少の筆を加へたやうであり、又春秋を書いた様子でありますけれども、春秋といふものが孔子の教になるといふのは一廻り廻つた問題であります。孔子の教を我々は、何に依つて受けるかといへば、論語に依つて受ける。然るに其の論語は孔子の筆に成つたものでは無い、孔子の弟子の有子と曾子の門人即ち孔子の孫弟子の筆になつたものであります。斯くの如く皆御話である、一體に話すといふことほど、貴いものはないと思ふけれども、世の中の大方の人達は話ですることは、輕蔑して文字に書き現はしたものであると、それは貴ぶのであります。即ち一席の話一言の音にも再び聴くことの出来ぬ教があるといふことは、打ち捨て、書物に書いたもので、而かも文章が好いとか悪いとかに重きを置く、これは甚だ間違つたことではあるまいかと思ひます。そこで大方の有様を見るに、學問をするといへば、唯單に書物を読むことばかりのやうに心得てゐる癖が、古來支那にも日本にも

話の價值

多いのであります。あの人はどうも偉い學者だなどといふと、書物を澤山讀む人のことであると思つて居るのみならず、自分も書物を多く讀むことが學問を覺えるのであると信じて居る。此に於て書物を読むことばかりを大層な價值のやうに心得て、お話といふことがどれほどまで大切であるものか忘れて居るのはなからうかと思ふ。書物は無論尊いものであります。價値のあるものであります。さりながら最も尊いところの五千四十八卷の經文、即ち佛の御説きになつた法門にしる、乃至孔子の説きのこされた書物に至るまで、畢竟これは何であるかと申せば、要するに悉く皆話の影、言葉の寫眞でありませう。即ち此の話といふことが根源である、それにも拘はらず大切なる話の方を捨て、置いて、其の影を寫した書物の方が尊いといふは、全く本を忘れて末を追ふことになるのであります。然るにそれほどに價値のあるお話でありながら、多くはこれを輕蔑してたゞ何も角も書物の方を確實と思つてゐる、彼の人が斯ういふことをいつたとしても、そりや本當にはな

らんといふ尤も中には無理もない本當にならぬ者が本當にならぬことをいふたりするから、話の價值も無くなるのである。然し偉い御方の御話はたゞ聴き放しに打ちすてゝはあけない自分ばかりが難有い貴いと聴いたばかりでなく、どうか多くの人々にも廣く聴かせたいといふ考が浮ぶほどであれば、其の弟子なり子孫なりが書き留めて書物にもするといふことになるのであります。これは全く價值のある御話であればこそ其の書物にも同じ價值が附くのであつて、其の源はといへば御話であつて書物はたゞその影を寫すに過ぎない。何遍言つても同じことである、それ故に近頃如何なる書物がありまして、其の書物を見たとけてはいけない必ず其の書物の所據を話して聴かせなければならぬ、聴かせなければ呑み込めないものがある。況んや支那の文字は一字一字の上にも種々なる義理が含んで居つて、たゞ文字を讀んだだけでは意味が解らないのでありますから、是に於て誰ぞに講釋を聞かといふ必要が起つてくる。即ち話の價值といふことは實に

さういふところにあるのであります。そこで話をする方でも眞實の心を以て話をする、これが直に價值のある言葉となつてあらはれるのであります。況んや話を聴く側にあつては餘程眞實の心を以て聴かねばならぬはずのことである。釋迦如來の仰せられた御言葉にも、現に此の娑婆世界に住んで居る我々互ひ人間といふものは、眼で物を見るよりも耳に聴くのが確かである。楞嚴經の中には示されてある位で、眼で物を見るには限りがあつて、前の方だけは眼で見えるが後の方で舌を出されても解らない。然るに耳で聴くといふ方は、聾でない限りは上下左右前後四方八面から聞くことが出来、それ故に觀世音菩薩も耳根圓通と申して耳から悟りを開かれたといふことも、楞嚴經の上に説き示されてある。即ち今我々互ひに話の價值を知つたならば、一言一句苟且に話すことも出来なければ等閑に聴き流すことも出来ない。冗語に時を費さぬやう、有益な話は少しても聞き洩すまいとつとめたいのであります。餘談は措いて釋迦如來は五十年間に淺く

も深くも種々様々に御説き遊ばされたけれども御自身筆を執つて書物に書き著はされたことは一度もない最初から終りに至るまで悉く皆御説法でありませぬ但其の説法が聴く人達の機根次第に依て種々に承はるものが出来た即ち智慧のある者はあるものゝやうに無いものは無いものゝやうに中には如響如應というて、つんぽかあしのやうに全然解らぬものもあつたといふことである、これを經文の中には如来一音演説法衆生隨類各得解と申して佛の御説法は一つであるけれども承はる衆生がそれゝの機根に随つて各々解了を異にしたといふことである、これは尤も釋迦如来にのみ限つたわけのものではなく、耶穌基督の如きも僅かの年月ではあつた様子であるが、矢張り始終説教をされたのである、それで聴くところの多くの人達がこれ亦た種々様々であつたと見えて現に記録として遺つて居る彼の四福音の書物に就ても、四通りながら別々のことが書いてあるやうに見えます、兎に角釋迦如来も耶穌基督も話に依て宗旨を弘められたに相違

ない、そこで今日我々が釋迦如来の御恩澤を蒙つて最尊無上なる佛法を聴聞することが出来るといふものは、初め釋迦如来から直接御説法を承つた弟子達が其の御説法を聴き覺えて居つて、自分の弟子に再び御説法をして傳へ、そのまた弟子が自分の弟子に話をして聴かせるといふやうに、斯様に相續することが凡そ百年ばかりでありましたから、其の間に随分間違ひが起つたこともある様子であります、其の事に就ては釋迦如来もなかく、如来が御方であつた、愈々御入滅といふ二月十五日の晩御涅槃に先つて十大弟子の中にも多聞第一の聞えある阿難尊者が佛に向つてお問ひ申したことがある、それは只今までに種々と承つた御説法を文字で書き顯はすやうな時には如何様に心得て宜しう御座いますかとお問ひ申した、其の時に釋迦如来が仰せられた御言葉に、必ず經文の最初に如是我聞と書いて置け、即ち是くの如く我れ聞く、此の通りに私は聞いたと書けと仰せられた、原語では何と言ふか知らぬけれども、漢譯には如是我聞或は我聞如是と逆に

書いたのもありますが要するに此の通りに私は承つたと書いておけ是くの如く佛が説いたとは言はせないのであります今諸君が私のつまらぬ話を聞いても種々に聞かれるだらうと思ふ失禮だが何が何だか解らぬことを言うて居ると思ふ人もあり中には何だか知らぬが能く饒舌る奴だと思つて聽いてゐる方もあるか知れませぬかと思へばあんなことよりもう些と高尚にやつてくれたらよさうなものだと考へてゐる人もありませう。釋尊の説法も自分の見識次第に聞いて居るから一つのものが幾通りにも意味を取つて居ることになる。それでは我聞の四字だけは必ず外さぬやうにしておけといふのが御遺言でありますところが私は斯う聞いたといふので百年も経つては異議が起る我々はさうは聞かぬいや我々は斯う聞いて居るといふやうな議論が起りますそこで私が聞いたところは斯うであるといふやうに筆に上げさせるより外に仕方が無いと遂に百年の後に多くの編纂員を集めて其の人達が筆に上げて文字に書きあらはすことに

なつたのださうでありますそれから後更に何百年も経つて支那へ渡り支那で漢字に翻譯されたのが今日我々が見るところの經文であります其の翻譯した時の有様は現に英吉利や獨逸の文章を日本文に翻譯する上に於て諸君方も随分御經驗がございませう多くの人々の翻譯した異つた翻譯を見合はせて御覽になれば原語には斯うあるけれども之を誰先生は斯う譯した何博士は斯う譯して居るといふやうに多少の異同は有るものであります即ち支那の翻譯は後漢の明帝の時に四十二章經といふものが翻譯になつたのが始めてありますそれから唐の太宗の時まで凡そ六七百年になりませう此の間に亦た多くの人達が翻譯したのであります大勢の中には天竺までわざわざ往つて學問して翻譯した人もあれば彼地から支那へ來て支那の言葉を學んで翻譯したのもありませうが其の後漢の時から唐の太宗までの間に出來た翻譯を舊譯と申します更に唐の太宗の詔を奉じて玄奘が翻譯した後のを新譯といひますが此の舊譯と新譯との間に御經の

言葉で大層意味が違うて居ることがあるのであります。今日歐羅巴のものなどを翻譯しますのに物の名や人の名などは都て翻譯は致しませぬけれども昔は佛や菩薩の名まで翻譯をしたのがあります。必ずといふほどでも無いのでありますが中には譯したのがある。即ち一方では觀世音菩薩といひ一方では觀自在菩薩といふ、舊い方では觀世音菩薩で唐朝の本では觀自在菩薩とある。觀自在といふことゝ觀世音といふことゝは文字も違ひ意味も異ひます。原語はアバロキラージユバラといふのであります。が姚秦の頃に羅什法師は觀世音と譯し、唐朝の玄奘は觀自在と譯したので、而かも舊譯は誤りであるといふ小言があります。然らば何故に後の人に誤つてゐるといはれるやうな翻譯を羅什がしたかといふに、必ず何か深い意味があつたのであらうと思ひますが、兎に角支那の文字に翻譯をする時は非常の困難をしたには相違ないのであります。諸君が専門の書物にせよ他の書物にせよ或は英文又は獨文のものを翻譯なさる御参考にもならうかと思ひます。

から一言致して置きますが、天竺の佛敎の原書を支那の文に翻譯する時には五種不翻と申すことがあります。即ち五つ通りの翻譯せぬと極めたことがあります。それは今日て申せば翻譯條例とていふやうなものが定つて、總て翻譯をするには是々の個條は守らねばならぬといふ規則が立つた。それのみならず一人て翻譯をするといふことは誤りを傳へるから許さぬ。彼地の原語に通じた人と此方の漢文に能く通じた人と文章ばかりでは無い。其の意味を明かに證據立てる人、これを證義者と申して此の三人が揃はなければ翻譯は出来ぬ。原語は解つても果して漢語にどう當るのが適當か分らぬやうな人では完全な翻譯は出来ぬ。さればといつて漢語の方はどれほど書けても原語が能く解らぬてはいけぬ。兩方ともに圓滿に通ずることとは餘程難いのであります。假令易いにしても二人集つて相談をすれば安心である。更に其の上へ一人意味合に間違ひが無いといふことを證據立てる證義者が交つて都合三人以上集つて翻譯をする。此の翻譯をする時に天

子の詔を受けぬ者は翻譯を公けに行ふことは出来ぬから彼の大般若經禪宗や淨土宗の御寺に大般若經といふが六百卷あります其の標題には大般若波羅蜜多經第何百何十何卷 大唐三藏法師玄奘奉詔譯とあります即ち天子の詔を受けなければ翻譯が出来ませぬから諸君が太平記を御讀みになつても御存じてありませう可笑しい話を書いてある即ち大塔宮護良親王が大和に於て般若寺へ逃げ込んで敵のために追はれた未有合ふ御經函に隠れて居られると此處へ敵の奴等が探しに來た時に蓋のある函は都て明けて見て蓋の明いてゐる分だけは大丈夫といつて捜さずに往つて仕舞つたが更に敵の奴等は戻つて來て彼の蓋の明いて居たのも怪しいからと箱の先で掻き廻してみたがこれより先き大塔宮は御運が好いから或は敵が戻つて來るかも知れぬと思し召されたのでそつと抜け出して他の函へ移つて御座つた果して蓋の明いてゐる分を探したが何も居なかつたその時に敵兵がお洒落を言つて行つたといふは名高い話であります大塔宮は

五種不讀

あはしまさず大唐の三藏法師ばかりあはします即ち大唐の三藏法師が翻譯せられた御經文ばかりあつたといふお洒落を言つたのであります斯くの如く必ず詔を奉じて譯したものであつてなか／＼喧しくいつた結局は五通りの原語は翻譯をせぬと規則を極めたそれは何々であるかといふと

(一) 彼にあつて此に無きものは譯さぬ

たとへばランプといふたやうなものでランプは日本の行燈に違ひない或は燈籠に違ひないけれども行燈とか燈籠とか譯してしまふたならば間違ひが起るそこで彼にあつて此に無い物であつたなら最初から翻譯をせず

にランプと言つて來たらランプで何處までも通すさうすればランプと行燈とを間違へる者は無い斯様な類は譯さぬ次に

(二) 多義を含むものは譯さぬ

これは一つの言葉の上に種々の意味を含んで翻譯が出来ぬもの例へば天竺の言葉で摩訶といふは三つの意味を含んで居る大多勝の三義即ち其の

形かたちの大きいといふ事ことと、其そのの量りょうの多いといふ事ことと、其そのの力ちからの勝まされて居ゐるといふ事こととの三さんつの意味いみを含ふんで居ゐる、それそれで據よりなく原語げんごを存ぞんじて摩訶まかといふ斯かういふ類るいは今日こんにちの翻譯ほんやくにも澤山たくさんあります、彼方あつちの語ことばを此方こゝちに譯やくするばかりでは無い、今いまでは三十年さんじゅうねんも昔むかしの事ことであるが、私共わたくしどもの朋友ともに中村敬宇なかむらけいごといふ人がありました、其そのの人が初めて自由じゆうの權けんといふ本ほんを譯やくした、其そのの時に私わたくしは忠告ちゆうこしたことがある、自由じゆうといふことが今日こんにちでは誰たれも間違まちがへる者は無なくなつたけれども、僅わずかか三十年さんじゅうねん前まえには自由じゆうといふことが大層世おほいそよの中に間違まちがひを傳つたへた、即すなはち三十年さんじゅうねん前まえに自由じゆうといふ言葉ことばを聞きくと總すべて氣儘きじま氣隨きじゆ自分じぶんのした放題はうだいにするといふこととてあります、義務ぎむを裏うらに持もつた權利けんりては無い、勝手かつて次第しだいにやつてしまふ、支那しなの古い句くに雨壓あめおさ梨花儘りかじま自由じゆうとか、若比わかしひ孤雲儘こうんじま自由じゆうなど、いふのがある、宋朝そうたうの眞山しんざん民范みんぱん石湖せきこ陸放翁りくはうおうあたりの詩しにあります、又また佩文韻府はいぶんいんぷを見ても餘あまり善よいところには使つかつてはありませぬ、然しかるに中村君なかむらきみが譯やくする時に此こゝの自由じゆうといふ字じを用もちひた、ために果はたして大層世おほいそよの中に害毒がいどく

を流ながした、それが漸おそく三十年さんじゅうねん程ほど経へつた今日こんにちとなつてはそんな害わざのないことは勿論もちろん誰たれしも自由じゆうといふ意味いみ合あを誤あやまるやうな者は無なくなつたのであります、即すなはち多義たぎを含ふむものは譯やくさぬといふことはその一例いちれいに過ぎすぎませんが、又また此方こゝちの語ことばを彼方あつちに譯やくすることの出来できぬことこともありませう、獨逸語どいつごにせよ、或あるは英語えいごでもさうですが、日本語にっぽんごを外國語がいこくごに譯やくすといふ場合あひあひ、俗語ぞくごにいふ「マ、サ、カ」といふことを譯やくして御覽ごらんなさい、「マ、サ、カ」といふ言葉ことばには何なんともいふにはれぬ味あじを含ふんでゐるので、そんなことは無いと極たぎめたのかといへばさうでも無い、「マ、サ、カ」といふ中には疑うたがいを含ふんでゐる、即すなはちそんな事は爲なさまいと思おもふが、若もしひよといふ意味いみが籠かこつてゐるのでありませう、之これを一つの言葉ことばに翻譯ほんやくすることは出来できませまい、さうすると凡まづそ翻譯ほんやくをするといふことは非ひ常に困難こんなんであるといふことが解わかります、もう一つ「サ、カ」といふ俗語ぞくごなども翻譯ほんやくは面倒めんどうでせう、此こゝの如ごとく普通のつまらぬ常識じょうしきを以もつて判斷はんぱんの出来できる事ことすらが、他國たこくの言葉ことばに譯やくすることは困難こんなんであります、況いはんや佛敎ぶつぎやうの幽玄ゆうげんな

るところの道理學問として見ても非常に高尚な哲學其の哲學の意味を支那語に譯す其の語法といふものは印度の語法と支那の語法といふものが反對して居るといふことは諸君も御承知でありませう印度の語法は我が日本と同じやうで動詞が後へ附く支那の言葉は何時でも動詞が上にあることは既によく御承知でありませう此くの如く語法が土臺轉倒して居るものを譯するのでありますから大層困難なのであります。

(三) 秘密の故に譯さぬ

秘密といひますのは眞言陀羅尼といふ質のものこれは譯さぬ方が宜いのである譯してしまふたら意味は淺くなつてしまふ翻譯といふものもやり様に依ては何の意味も無いことになる。

足曳の山鳥の尾のしだり尾のながくし夜をひとりかもねむ

といふは大層名歌ださうでありませうけれども之れを漢語に譯して申さば足曳に意味はない山に掛かる枕言葉である山にも用が無い鳥にも用が無い

い山鳥の尾に用がある其の尻尾の中のしだり尾といふのが入用なのであるそれは何の用かといふに足曳の山鳥の尾のしだり尾のといふところまては何も用が無くて其の尾が長いといふに掛けたながくし夜といひたいためであります冬の夜ながに自分の思ふやうな理想的の朋友とても枕をならべて居たらさぞ嬉しからうけれどもたゞ獨りてぼんやり寝てゐる獨り寝るさへ小腹が立つに灰毛猫めが鼻甜めたねつからどうも感服しない此の長いし夜を獨り淋しく寝るのかいな誰か友達でも來れば宜いながらもなくては寢飽きて仕方が無い話相手も無いと斯ういふ意味であるさういふ意味だから漢語に譯するとどうですか永夜獨寢と譯したさうでありますそれは何の意味も無いことになるこれはどうしても原語のまゝで味うて置くより外に仕方が無い譯してしまつてはつまらぬことになるそれから

(四) 譯せざるに利があると見るものは譯さぬ

譯してもよい譯さないてもよいといふ場合に譯さぬ方が利益があると認められたものは之を譯さぬ更に

(五) 尊勝ならしむるために譯さぬ

これは尊く見せるために譯さぬ譯してしまふとつまらぬものになつてしまひますから原語のまま存しておきますと其の意味が非常に尊く聞える場合がありますたとへば日本の神々様の御名のやうなものであります神大倭磐余彦命といふやうな御名を譯したらどういふ意味になるか之を獨逸語に譯してみても尊勝を失ふてしまふことになりすから我々日本人の言語であつて而かも餘程尊勝の意味を含んで居るから其の意味を彼方の人達にも能く得心して貰はねばならぬ此くの如く以上五つ通りは翻譯をせぬと極めたさて又翻譯をすれば譯せられるものの中に於ても原語が此方に當らぬものが出来てきます支那の方に文字の無いものが出来てくる同じ様でありましたも意味が違ふといふ例をいひますと摩訶といふ

字は前申したやうに大の字になります此の下に羅の字が附く摩訶羅となると支那の愚の字になるさうです今日愚かな人のことを馬鹿といふのは此の摩訶羅から誤つたのでありませうが昔の原語のまゝハイカラの坊さんなどが彼奴は愚な奴だといふところを摩訶羅といふたそれが遂に間違つて馬鹿といふことになつたといふ話であります兎に角摩訶羅といふは愚てありますけれども但此の愚といふことが世間に謂ゆる愚といふ意味では無い世間の人がどれほど伶俐であつても伊藤博文さんや大隈重信さんよりもつと伶俐であつても佛法の上に於ては安心立命に於て智識がなかつたならばそれを名けて佛敎の上からいふ宗教上の愚である即ち摩訶羅であります世間の愚といふことにはその程度が違ひますそこで摩訶羅といふ字を翻譯する時に愚痴といふ痴の字を附けてある愚痴といふ熟字は佛敎の翻譯以前には無いどのやうな古い辭書を御調べになつても愚痴といふ熟字はありません愚痴といふのは摩訶羅を翻譯するために出

來た譯語であります。又般若といふこと般若面をしてゐるなどいひます。がさういふ意味では無い。般若を直譯すると智の字になります。然し支那で俗に謂ふ仁義禮智信といふた時の智の字とは違ふ。其の方の智であれば今申した如く伊藤博文さんや大隈重信さんなどは立派な智者であるに相違ありません。いふが佛法の上ではさういふ智では無い。世間の事に就ては愚なやうに見え金を溜めることも知らず公爵にも伯爵にもならぬけれども安心立命の點に於ては釋迦にも彌陀にも譲らぬといふ側の智者があるとしたならば即ちこれが立派な般若の智になります。それで智といふ一字では間違ひますから智慧といふ熟字が出來た。智慧といふ意味は仁義禮智信の智と似ては居りますけれども程度が違ふのであります。此くの如く翻譯をするために殊更造つた熟字がありますから、これがまた世間の漢籍ばかり讀んだ頭を以て、佛教の書物を見れば分り悪くなる一つの原因であります。斯んなことは澤山ある、それから熟字ばかりでは無い文字までも新に拵へ

たのが幾らもあります。一例を申すと摩羅といふ原語があります。此の原語がどういふ意味かといふに障礙といふことである。諸君は摩羅と聞いてお笑ひになるが其の笑ひ聲の起る點から見ても摩羅は確かに障礙なものである。其の點からばかりでは無い。眞面目な點から見ても障礙と訓ませて謂ゆる邪魔になる意味である。眞智の妨げをすることになる。諸君方は御醫者さんにならうと思つて折角此處で勉強して御座るのでも種々様々な障りが起つてくる可笑しい方ばかりを考へてはいけません。眞面目の方から其の障りになるといふは、いろ／＼ありませうけれども其のいろ／＼あります。すのを摘んで申せば凡そ四通りに説きます。其の四通りの中の一つは確かに生命のあるものであります。それを現はすがために魔といふ新字が出來ました。此の字に鬼が附いて居る。鬼が附いたのは我々の總ての仕事の上には妨げをして來るものが、何ぞ此處に天狗とか禍神とかいふやうなものが冥々の中に居て、それは西洋の方でいふと例のサタンとかいふ質のもの、いは

人の妨げを好むといふ魔是は梁の武帝の時に出来た字ださうでありま
すから説文にも爾雅にも無い斯ういふやうな態々佛敎新譯のために拵へ
た文字もあります。

もう一つ原語と譯語と一緒にしたのがあります此方でもさういふことは
幾らもありますがランプ臺などといふ類ランプといふは外國語で臺とい
つたのは譯語であるこれは梵漢兼舉といふのて一例を申せば原語に懺摩
一にナンマと訓むこれを漢譯すれば改悔又は悔過であります耶蘇敎など
でも悔い改めといふことを始終言ふ様子でありますが、あゝこれまでは悪
かつたと自分から己れの罪を認めるのが即ち改悔或は悔過であります今
までの行爲を悪かつたと自ら悔るのが原語で懺摩ですそれが遂に懺悔と
いふ語を造り出した上の懺の字だけは原語の懺の字を持つてきて下へ漢
譯の悔過の悔を附けて懺悔といふ熟字になつた上の字に原語の意味は無
い下の悔の字が大切であります此くの如く原語と譯語と二つ綴つて一種

の熟語が出来てきた斯ういふものが佛敎の専門語には澤山あります之を
世間の言葉から見ても康熙字典を引いて懺の字はどういふ字だといふ事に
なると飛んでも無い間違ひが起る支那の立派な學者先生でなければも南
無といふは天竺の原語で歸命と譯する即ち仰せに隨ふといふことである
とは知らないで南無の二字を漢字の上から解釋して南といふは南方の義
無は虚無の義である即ち南方は夏に配當するので最も時氣の盛んな時で
ある物に喩ふれば東は本に當り南は火に當る然るに佛敎といふものは北
の方を貴ぶ北は陰氣なもので南方の力は無いといふことを表明した言葉
で南方虚無の義であると斯ういふことを眞面目に講釋をした支那の學者
がありますそんなやうな考て佛敎を見たならば佛法といふものは到底解
るものではないから漢學の眼を以て佛敎の書物を見ると非常に誤りが起
るそれらのことに就て可笑しい話も澤山ありますけれども時間が無いか
ら預りとして置いて此くの如き理由で佛敎は言論が違ひ字句が異り字

謂まで變つて居りますから突然これを見聞しても俄かに其の津梁を得ることは出来ません、一度や二度聞いたのでは手が附かぬ茫然として路傍に躊躇するもの滔々として皆是なりて、折角佛敎を研究してみたいといふ志を起しても種々な困難のために其の目的を貫くことが出来ぬというては甚だ残念千萬なことであり、それとてどうしたならば佛敎を研究し易いであらうかといふことを考へてみますと、畢竟これまで種々な困難の生じたといふも、枝葉のことが喧ましくなつたのであるから、其の枝葉を取り捨て、根本に立ち戻つて見れば、さまで六かしいものには無い極めて單純なものである、其の單純な根本に溯つてみれば、さほど困難を感ずるものには無い、もとより私とても専門に學んだといふ譯ではないけれども、長い間其の事に志して居つたものでありますから、何やら髣髴と其の謂ゆる根本思想が自分だけには見出されたやうな心持がする、其の自分の見出しただけのことを極めて單純に言うてみますれば、三信三行といふことになるので

根本思想

あります、先づ三の字は後の話として置いて、約るところは信と行の二字に纏つてしまふのであります、下に追々と之をお話いたしませう。

第二章 佛教の原理

今回は愈々信行綱領の本文たる三信三行といふことに就て御話するやうな順序になつて参つたのであります其本文を文に就て御話する前に大體の御話をして置く方が御解り易からうと思ひます。

信と行

先づ信といふは我々が心の中に是れに違ひないと確かに受取つて確かに得心した合點した姿を信といふのであります此信の字は普通の漢字の意味を康熙字典流義に講釋しますれば人の言といふ字であります即ち我々が物を言ふ上に於て誰を突かないといふ意味合の字でありますけれども今宗教就中佛教の上から此信の字の解釋をします時には信は不疑に名ける疑はない意味合が即ち此信の字の義になるのであります即ち我々が物の道理を能く得心してそれに違ひの無いといふ心に合點が行つて少しも其間に疑ふ所心もとなない所が無くなつた姿を信と云ふのであります更

經 佛教の所

に語を換へて見ますれば我々御互に心の落付がしつかり出來て假令どのやうな事が起つて來ましても如何なる境遇に出遭ひましても決して其心が動かぬといふ場合に到りましたのが信であります然るに其心に確かに受取つたといひ又疑が霽れたと云ふだけのことでは宗教は役に立たぬのでありますそこで行といふことがそれに連れられて來る。

行といふのは何であるか其心に信じた通りに身に行ふことであります心に信ずるところを身に行ふそれより外に佛法といふものは無い一體は佛法に限らぬことであらうと思ふのでございます總ての宗教とか道學とかいふ筋のものは皆さうであらうと存じますけれども他の事は先づ指いて私共が信ずる佛教の上に於ては心に信ずるところを身に行ふ斯う云ふ極めて簡単な言葉に纏まつてしまふ釋迦如來の説き置かれましたものを五千四十八卷の經文と云ひ或は八萬四千の法門と云ひ動もすれば大層な數字を列べまするけれども詰る所は此信の字の説明と行即ち身に行ふと

この方法とを言ひ立てたゞけのものであります、それで信といふのは即ち我々御互の心に落着が付いた姿でありまして、語を換へて言へば我々御互の心の繪圖面を書いたものが御經であります、それが唐朝ころの卷數で五千四十八卷もあるといふた、さて又其心の繪圖面に付て我々の身に行ふ圖解をしたやうなものが八萬四千の法門要するところ我々の心に落着が附いて身の行ひが其心に信じた通り行はれてゆく人物であつたならば、それで佛法の能事畢るのて、實に佛法の能事畢るばかりで無く、我々御互が生れて萬物の靈長と言はれる人間の能事畢るといふのであります。

其信といふは吾々の心にどう云ふ落着が附くのであるかと言ひますれば、其裏は即ち疑といふことである、信の方は我々が何時でも持つては居らな

いが、疑だけは確かに持つて居る、其疑といふことも起らない者がある、まだ疑の起るまでに行かない程に痴鈍な人間が世の中に澤山あります、何事に就ても己に疑が起るやうになつたならば、其れは一段の階級を卒業したの

てあります、總て世の中のことに疑の起らないのが先づ滔々たる天下皆其様であります、そこに疑が起つて來るといふと、サア其疑がナカ／＼解けない、其疑が解ければ即ち信であります、其信の所に到ることが出來ぬのであります、すから疑に疑が重なつて學問をすればするほど理屈が分らなくなつて來る、トウ／＼杜舞には何處まで行くか行先に困つた結果、華嚴の瀧などへドブ／＼近頃では更に新發明があつて、鐵道往生もあれば、硫酸を服むのもある、これは皆何から來たか皆悉く信不及、信を得ない所からであります、即ち疑が晴れぬからであります、其疑に種々様々な程度がありますので、此借金はどうしたら返せるか、此暮はどうして越したら宜からうかと迷ふのも皆疑である、是は斯うする、アレはア、するといふ確かな信さへあつたならば、何も心配することは無い安心なものであります、其安心が即ち信を得た姿である、其安心が出來ないのが信の無いので、どうして宜いか分らぬ、分らへすれば平氣なものであります、御醫者さん方が病人を御扱ひなさる

時でもさうであらうと思ひます。患者が非常に疑に沈んで煩悶する者があつたら、何でも無い詰らぬことだ、さう心配するなと仰しやつてもモウ是て命がごいませうか、唯一人の孫でございますなど、いふやうな婆さんなどに、出合つたら御醫者さんも始末にいかない、其疑の爲に更に看病人が病氣になる、病氣に病氣が重なつて、そんな病氣は無いはずだが、どうしたわけかと、醫者さんの方でも今度は分らなくなるかも知れない、即ち疑に疑が重なつて行くのでありますから、始末が附かぬことになるのである、かやうに總て疑といふものは我々に大層な苦悶を與へるものであります、が、今此處で言ひまするのは、此疑の中に付て根本の疑が解けてさへ來ますれば、此御話の殆ど大要を盡すことが出来るのであります、そして其疑は何から起るか、極く高尚な疑とても申しませうか、それは一體何であるかは、宇宙が分らぬ、天地が分らぬ、何の爲に一體世界といふものは出來て居る、萬物は何の爲に出來て居る、萬物はさて措いて自分は一體何の爲に出來たか、弘法大

疑の根本

師が生の由來する所を知らず、死の趣向する所を知らずと言はれてあります、實は弘法大師が言はぬても其通り、我々生れて來たのは一體何の用があつて來た、斯んな厄介な娑婆に何をして居る、五十年七十年魔胡々々して、不幸だとか仕合せだとか、富貴だとか、貧乏だとか、善いとか、惡いとか、權利だとか、義務だとか、種々様々な馬鹿騷ぎをする、食つて衣て、寢て起きて子を拵へてそれから先きはどうする、それから先きは死ぬばかり、一體人間は何しに來た、學問をせねばならぬ、身を立てねばならぬ、富貴にならねばならぬ、さうしてどうする、さうして喰ふ、幾ら學問をしても喰ふ爲にならないものなら、よさう、學問は喰ふ爲にする、喰ふのは何の爲にする、喰はないでも生きて居れるなら喰はないでも宜い、氣の毒なことには電話の發明が出來た、無線電信の發明も出來たけれども、未だ喰はずに生きて居る發明が出來ない、そこで喰はねばならぬ、喰はねばならぬから世の中が騒々しくなつて來た、世の中の總ての者が喰ふのは結局何の爲か、生きて居る爲だ、そんなら何時まで

生きて居るか死ぬまで生きて居る。死んでどうするどうなるか分らぬ。何だか知らぬが死ぬまで生きて居ねばならぬ。死ぬまで生きて居るといふことは譯は無いやうだが、さて其事が大困難な爲に裁判所も賑かてあり、警察署も繁昌する。樂に死ぬまで生きて居ることが出来れば世の中に權利も義務も要りませぬ。政治も法律も要つたものではない。誰も彼も五千萬人が皆悉く何の世話も無く皆樂に喰つて死ぬまで生きて居るといふ話ならば政治も法律も要りませぬ。我々が死ぬまで生きて居らねばならぬといふ事が大困難な爲に種々様々の世の中の事が起つて来た。それで満足に死ぬまで生きて居ることの出来るのは餘程仕合せな人だ。死ぬまで生きて居られない人が中々に多い。死ぬまで生きて居られない人はありさうも無いが、死ぬまで生きて居ることが出来ないから途中で首縊つたり土左衛門になつた。して死ぬまで生きて居られない。死ぬまで満足に生きて居られれば首を縊る必要はない。さう云ふことが喰ふ方の側ばかりかと思ふとモウ一段高尙

になつて来ると前申した苦悶の結果華嚴の瀧や淺間の噴火口に飛込まねばならぬやうになる。人々皆悉く死ぬまで生きて居るといふことの中々六づかしいといふ事がこれに分る。

此の如く大きな疑が起つて来た時に我々はどう之を解決したものであらうか。それを約めて言うて見れば天地萬物總ての物はどう云ふ譯で出来たか。斯う云ふ疑が誰でも起つて来るらしいのであります。此疑の極めて高尙に起つた人を擧げて見ますれば我々が古へから大聖人として信じて居る人で孔子といふ御方も此疑に責められたのであらうと思ひます。

孔子一生の履歷を伺つて見ますと色々ございませうけれども、加我數年五十以學易。可以無大過矣。我もモウ五十年も命があつて易を本當に學ぶことが出来たならば、大なる過タントの間違ひないやうになるであらう。誠に覺束ない言ひ草でございませうが、孔子大聖人何の爲に易にさう力を入れただのであるか。韋編三絶。というて易の書物を讀まれる中に三度まで牛の革

て綴ちてある其綴糸が切れた、それ程まで易を引繰返して研究せられたが、それでも足らなくて我に數年を加して云々といふの嘆聲を發せられたのである。さて其易といふものは何が目的であるか、天地萬物の成立つ有様、天地萬物の活動する有様を説明したものだといふことは、苟くも漢籍に指を染めた御方は御承知でありませう。彼は何と言うて天地萬物を解釋して居るか、と云ふに、太極生兩儀、兩儀分四象、四象生八卦、天地の大源は混沌として、鶏子の如く真圓にして眼も鼻も無い、何とも形容の仕様の無いものであつた、それが陰と陽との二つに分れて即ち兩儀を生ず、片方は陰となり片方は陽となり二つに分れる形を持つて來たから兩儀といふ、それから此兩儀即ち陰の方も陽の方も更に二つに分れて四象といふ、四つの象になつた、此四つの象といふは少陰、少陽、老陰、老陽であり、此四つが又各二つに分れて、乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤といふ八卦が起つた。此處へ先づ土臺を据付けて置いて、是が又八卦が八卦と互ひに錯綜して、八八六十四卦の象になり、それに宇宙間の

總ての有様を纏めてしまつて説明したのが易でございます、更に之を逆に申せば、天地萬物を六十四卦に纏め、六十四卦を八卦に纏め、八卦を四象に纏め、四象を陰陽の二つに纏めた、其陰陽は何から起つたかといふと、唯だ一つの大極から起つた、其大極といふは何である、それは真圓な物で混沌として、眼も鼻も無い、未だ形象の無いものだといふ、ただ承知が出来なくなつたのが宋朝時代である、近頃でも哲學者連中にはそんな事を論じて居る人も多くありますから、哲學に志して御座る御方は御承知でもございませう、が、それは宋朝時代に此佛教が盛んになつて來て、一方に於ては天台や華嚴の學問が盛んになり一方に於ては禪宗といふやうなものも盛んになつて來たのが唐朝から宋朝の頃である、此佛法の學問が盛んになつて來ましたのでございませうから、儒者先生達の方でも昔のやうな事ばかり言つて居たのでは、どうも佛教と桁が違つて面白くない、それで此際に當つて彼の周濂溪、茂叔といふ人、彼の愛蓮説といふ名高い文章を書いた人、あの人が大極圖

説といふ物を書いたあの人が書いたとか書かぬとかいふ細かい説もござ
 います。先づ周濂溪の説だといふこととあります。大極圖を描いて其圖の
 説明をしましたのが大極圖説であります。此圖説が基となつて遂に彼の朱
 子學といふ學問が出来て古學者といふ古い儒者から見ますると是はモウ
 儒者の學問で無い孔子の學問では無い。佛敎や老莊の學問が雜つたものだ
 から純然たる儒學で無いといふ程になつて來た。其大極圖
 説には大極は無極である。即ち大極の上に無の字を附けて大極者無極也。此
 處まで行つた時に道教や佛敎と同じ度合の處まで進んだつもりである。此
 易といふものと佛敎といふものとを掛合はせて議論をします事はモツ
 と前から既に唐朝時代に柳宗元が其議論をして居ります。佛法といふもの
 を韓退之が非常に排斥をした。然るに其友達であつた柳宗元は佛法は斥す
 べからず、さう排斥するには及ばぬ。何かといふに我が易中庸と其趣を同
 して居るから排斥するに及ばぬと言ふた。即ち柳宗元は易といふものと佛

法といふものは同じ様子なものだといふ事だけは見て居たやうでありま
 す。けれども其頃には未だ大極は果して何物であるぞといふ所までは論じ
 て無いのが、宋朝に至つて周茂叔程明道兄弟あたりになつてから全く一つ
 の儒説となつて謂ゆる性理の學が成立しました。是等は何かから起つたか。畢
 竟宇宙萬象の成立つ有様宇宙萬象の働く様子。是は何故であらうぞといふ
 其根本の詮議に掛かつたのが其う云ふことになつたといふ一つの例であ
 ります。

又西洋の側に付て言つて見ませう。今日最も盛んに貴ばれて居るものは基
 督敎である。基督敎といふものは一體何が本になつたが、矢張り此宇宙萬象
 の成立つ有様、天地萬物は何の爲に出來た、誰が拵へた、どうして出來た、誰ぞ
 此世界を作つた者が無ければ出來るものでは無い。易の方では本極生兩儀
 兩儀分四象てやつて居るけれども西洋の側では西洋と言つても耶蘇とい
 ふ人は亞細亞の人でございませうが、兎に角アテラに弘まつた基督敎の側

てはモツと前からさう云ふ議論は色々あつたてございませうけれども是は天地萬物森々羅々悉く同じ姿の物は無い、大きいもあれば小さいもあり、長いもあれば短いもある、富貴貧賤、高いもあれば低いもある、何故に斯う錯雜したものであらうぞ紛亂したものであらうぞといふ疑を確かに解かうとする即ち信を得やうと掛かつて行く、其結局が天地萬物悉く複雑なものて且つ紛亂したものであるけれども、其大源はゴッド、唯一の神様、獨一眞神といふ一體の神様が御造りなされたのであるから我々萬物の手前てこそ別々のやうなもの、その大源に溯つて見れば唯一の神様即一人て在ッしやるといふ考が起つて来る、それで萬物を太極といふ一つに纏めて行くのと、其一つの物を獨一眞神に纏めるのと其纏め方に於て違ひはありませんけれども萬物を一つに纏めて行くといふことは基督教も孔子の教も同じことであらうと思ふ、御釋迦様だとしても、別な考が起るはずは無いから萬物は此の如く森々羅々として複雑紛亂せるものであるけれども、其源は一つて無

ければならぬといふことは是はもう外の聖人達の考も御釋迦様の考も方向は同じことに行つたらしいのであります。

それで御釋迦様の方の考は何處へ行つたのであるかといふに即ち三信といふ方の側になつて来るのであります、孔子様の方で見ますと中庸にも天命謂之性、率性謂之道、修道謂之教と斯う云ふ語もあり、天といふこと、性といふこと、道といふこと、教といふこと、四段になつて居ります、下から逆に行くと教といふのは何だ道を修むるのが教だ、道といふのは何だ、性に率ふのが道だ、その性といふのは何だ、天の命だ、然らばその天といふのは何だと斯うなると上天の事は音も無く香も無く其れ至れる哉、論語には夫子の性と天道とを言ふは得て聞くべからずとあつて天の講釋は無、そこで其天といふ字が色々に解釋せられて、或場合ては基督教のゴッドのやうに見えるところもある、文王といふ御方の居處を言つて、帝の左右に在り、文王は上帝の御側に行つて居ると云ふたこともある、斯う言ふと上帝といふのは何か此

處に人格を具へた神様が御座らなければならぬやうになる。然るに又或處合ては前にも申した通り性與天道不可得聞性と天道との御説明は無い御弟子達も聞くことが出来なかつた中庸では音もなく香もなくして説明の外である。然るに耶蘇敎の方では其處を確かに言ふのであります。新敎に於ては左程重きを置かぬことださうてありますけれども御承知の如く猶太敎又は加特力敎に於ては深く信じて居る彼の創世記に據れば神様が此宇宙萬象を造らせられた時の造り方まで書いてある。それは所謂神話的のもので御座いまして説明の仕様も色々ございませうけれども神様が物を造られたその順序まで書いてありますから、アテラては確かに人格的の神といふことを信せねばならぬのが當然になるのであります。語を換へて一口に申せば孔子の方では天地萬物は太極が陰陽と分れて出来たのだと言つたゞけの話であります。其太極といふものが其儘萬物であるのやら萬物の方が太極といふものになるのやらそこの説明が誠に漠として居ります。

基督敎の方はさうて無い明かに言うて居る明かに言ふけれども我々はさう云ふ神様があつて萬物を御造りなされたといふことは、どうも疑が解け兼ねるのであります。然らば釋迦如來の流義ではどう言うてあるかと言ひますと、天地萬物を説明する上に付て即ち三つのものを此處に立てるのであります。其三つといふは何であるか體と相と用此三つのもので天地萬物を説明する。此中の萬物と稱へますのは何である即ち相であります。世の中のありとあらゆる事物が相相といふのは即ち姿であります。此姿といふものは千差萬別のもので同じものは一つも無い我々御互ひ人間といふ者は大體から言ふたら人間で、犬や猫と違ふところに於ては同じでありますけれども一人も同じ者は無い乃至宇宙萬象同じ物は無い皆悉く違つて居りますから相といふ物は悉く差別の姿のものである所が其差別の上に付て我々は疑が起る。何故に斯う差別のものであらうぞ同じ人間の中でも富貴の者もあり貧賤の者もある精神の善いものもあり、悪い者もある我々は何

て生れて来て何て死ぬか生れない前はどうか死んだ後はどうか
 あらうぞといふところが疑の大關であります我々が生れさへしなかつたなら
 ばイサクサはない生れたのが抑大失錯てあります既に生れたといふ其時
 に向ふの方に死るといふ事が待構へて居る死ぬといふことは餘り感服し
 ない有難くないけれども幾ら有難くなくても感服しなくても向ふて待構
 へて居る據なくそこへ行かねばならぬ徴集された兵隊同様で否でも應て
 も死といふ戰場へ行かねばならぬ人間と人間が戦争をやつてゐるのは少し
 ばかりの怪我位で歸つて来て嗚や子供の顔を再び見る者もあります此
 死の戰場は間違ひなく討死と極つて居る是は誠に厄介な話である吾々が
 生れる死るといふ前後の大關之を生起の關と申します此生死の關を透得
 する通抜ける其生れる死るといふことの大疑問をはらすといふには何故
 に宇宙萬象の有様が此の如く千差萬別一つも同じ物は無いのであらうぞ
 といふことを考へて見ねばならぬそれを考へて見ますに付て初めて體

といふことに溯つて研究して行くのであります其體を或は基督教に於て
 はゴッドとも言ひ神様とも言ふのであります孔子の教では易の方では太
 極と見たのでもございませう佛敎の方では之を何と見るか其名前は色々
 の名が附けてあります或は眞如と言ひ或は法性と言ひ或は妙心と言ひ或
 は實相と言ひそれに或時には人格を與へ生命を付して南無阿彌陀佛とい
 ふ名を附けることもあり南無毘盧遮那佛といふ名を附けることもあり或
 は觀世音菩薩といふ名が附くことも普賢菩薩といふ名が附くこともござ
 いませうけれども宇宙萬有の本體といふものは如何なるものであるかと
 いふ事を研究して見ますれば此瀬戸物には水瓶もあれば摺鉢もあれば茶
 碗もあれば徳利もあれば土瓶もあれば皿もある種々様々な物の型即ち相
 があります水瓶が徳利で無く徳利が皿では無い摺鉢は茶碗で無く尿瓶は
 土瓶で無い皆別々の相であります然らば別々なのであるから何處までも
 別物であるかといふに其體を調べて見れば同じ一つの土であります土と

いふ手前から言ふた時には徳利の土だの茶碗の土だの皿の土だの水瓶の土だの摺鉢の土だのといふ差別は無い唯同じ一つの土である其一つの土の體がどうして斯う相に於て變つて來たのであるかと申せば其變り工合が神様があつて變らせたとはいふのでも無ければ自然にさうなつたとも佛敎では言はないどうして出來たのであるかと言ふに其の本體たる土の性質は其手續次第で如何なる姿にても現はれるといふ性質を持つて居るのでありますから摺鉢になるべき手續が掛つて來れば摺鉢になり水瓶となるべき手續が掛つて來れば水瓶となる或は茶碗となり皿となり徳利となる皆其の手續次第で種々様々の相と變つて來るけれども其の體は平等一味で差別が無い唯々手續の違ふたに依つて摺鉢は摺鉢水瓶は水瓶徳利は徳利皿は皿茶碗は茶碗といふやうに種々なる形を起して來たのであります其手續といふことを佛敎の専門語では之を因縁と申すます其因縁が千差萬別であるから其果報も千差萬別である之を約めて言へば因果世間の

學問の言葉で謂ふ原因結果此原因結果の規則に支配せられて水瓶となるべき原因結果は水瓶の相を現はし摺鉢となるべき原因結果は摺鉢の相を現はして來たのでありますから其の相は違つて居るけれども其の體には變りは無味平等のものであるさうして見ますれば土の外に摺鉢もなければ水瓶も無い水瓶の外に土もなければ摺鉢の外に土も無いといふことになるから體其の儘が相て相其の儘が體である基督教と佛敎と大に違ふところは此處にあるのでアチラではゴッドといふ名を附けて居る名は何ても宜いが萬物を造る神様と其の神様に造られた所の萬物と同じ物であるとは言はれない神様御自身が萬物になつたとは言はれない神様は犬や猫を造つた又人間を造つた馬鹿も造つた利口も造つた位地の好い者も悪いものも御造りなされたといふ事であるから造つた御方と造られた物と同じといふことは言はれない然るに佛敎はさうて無い天地萬物即ち造られた物其の物が直様造り手の體である真如である法性である其真如法性其

佛教の根本思想
 七四
 の儘の體が己の本からの姿である。それが種々様々な因縁果報の規則に動かされて種々様々な相を現はしたゞけのことであり、また體の外に相があるといふことは言はぬ、相其儘が體であるといふのでありますから、西洋流義の學問で言ひますれば佛敎のことを汎神敎とか萬有神敎とかいふ部類に入れるとかいふこととありますが、それは向ふから言ふ話で我々佛敎者自ら言ふのでは無い、汎神敎即ち世の中にありとあらゆる物其の物が皆そのまゝに神様である、神様といふものが萬物の外にあるのでは無い、萬物其の儘に神様で花の咲くのも神様の御姿、月の照るのも神様の御姿、雀のチュイ〜も鳥のカア〜も犬のワン〜も猫のニャーニャアも皆其の儘に神の御聲である、といふことは佛敎では申すのであります、溪聲便是廣長舌、山色無非清淨身、巍然たる山の美しさが其儘に毘盧遮那如來の御姿である、溪川のザワ〜と流るゝ水音大海の浪の騒々〜と鳴り響く有様が其儘に大毘盧遮那如來の御說法の御聲である、これは宋の蘇東坡が作つた詩の句で

ありますが、斯う云ふ者が佛敎では起つて來なければならぬのであります、佛といふのはどんなものかといへば柳は綠花は紅山は高く水は長し、此外に佛法は無い、斯う云ふ所まで佛敎は行くのであります。
 然らば其次の用の御話は、何うであるかといふに、天地萬物皆其體を以て見れば平等一味の土であるけれども、摺鉢となるべき因縁があつて摺鉢の姿が現はれて見れば摺鉢は決して徳利の用は作さぬ同じ土だけれども徳利となるべき因縁があつて徳利となつたものは水瓶の用を致さぬ、尿瓶には尿瓶土瓶は土瓶皆其用即ち働きは違ひます、働が違ふとしたならば其用が別別であるから互に關係が無いかといふに、元來一つものが暫く假に動き出して相が違つただけの者であるから、萬物互に相關聯して其間に少しも脈絡が切れたものでは無い、是は我々一人の身體でも此宇宙といふ一つの大きな身體と同じである、同じものと見なければならぬ、我々一つの身體の上でも眼は眼、耳は耳、眼は眼の因縁があつて眼となつた、耳は耳の因縁があ

つて耳が出来て居る御隣り同士の情誼に互に代理をして呉れても宜い
 は無いか、ア向ふから美しいのが来たぞ、今折角本を見て居るから耳貴様
 ちよつと見て居て呉れないかといふやうな譯にはゆかぬ誠に融通も利か
 なければ情誼もない様である耳は耳鼻は鼻、眼は眼、頭は頭、足は足、骨は骨、肉
 は肉、筋は筋、皆悉く箇々獨立獨尊にして他の支配を受けないかと思ふと其
 間に脈絡貫通といふことがあつて、眼で物を見てアイツ欲しいなと思つて
 取りに行かうとしても足が動かない、どうやら片足ブラ／＼やつて見たが
 手が届かない、頭が心配する眼が心配するけれども手足が動かない、そんな
 事ではモウ高木さんの病院へ來ても駄目ぢや、さうすると是がチヨツと眼
 が見たと思ふ途端に電信も電話も入らない、直に差置かずに手も足も働ら
 く、足へ蠅がとまつたと見れば直ぐと此手が往て其れを拂ふ、ア何か汚い物
 を踏付けたと思ふ時に汚ないからといふ譯にはゆかぬ、足公貴様が失錯し
 て此様な不潔な物を踏んだのではないか、わしは今洗つたばかりの手だか

ら貴様には構はない、わしは貴様の奴隷となる義務はないなどといふこと
 は言はない、此道理は宇宙萬物皆同じことである、我々が若し宇宙萬有と聯
 絡を絶たれたならば氣の毒ながら一日も片時も生きて居ることは出来な
 い、飯を喰はぬても成田の不動に二十一日断食して平氣な者も幾らもある
 が、一時間はサテ措いて一分間も吸はずには居られないものは酸素である、
 此酸素は一體誰が供給して呉れるのである、其の供給者たる草木にストラ
 イキを始められた日には、我々は片時も生きて居られない、宇宙萬有皆悉く
 此の如き關係なものでありまして、其相の變つた儘、其用の違ふた儘に互に
 相聯絡して持ちつ持たれつ助け合つて行くものであるといふことは明か
 でございます、それは今釋迦如來が其う言ふたから其うなつたといふわ
 けては無い、釋迦が言つても言はない、宇宙萬有自然に皆其の通りであ
 る、本體に於ては一味平等であるのが、因縁果報の掛合せて現相が千差萬別
 の姿となり、千差萬別の現相であるから千差萬別の妙用が互に相聯絡せぬ

ければ互ひに皆役に立たぬことになる。臺所にある水瓶がいくら獨立獨尊
 て摺鉢の世話にもならず徳利の厄介にもならぬと言つて水瓶一つが臺所
 に威張つて居ても摺鉢が味噌を摩る時に其水瓶の水を使つて呉れなけれ
 ば水瓶も水瓶の用をなさぬ徳利や茶碗の關係も皿や鉢の關係も皆悉く相
 聯絡して互ひに其妙用を顯はすのであるから其中でどれが主人でも無け
 ればどれが家來でもない若し主といふことを一つ立てるとすれば天地萬
 物皆互ひに主人公であります。今こゝに茶碗が一つある此茶碗を宇宙の中
 心へ置けば茶碗の用は茶碗だけのやうであるけれども此茶碗の用即ち働
 きを現はすが爲に此の茶碗を置く此の盆もあれば此のティーブルもある此
 のティーブルは何である此の茶碗の奴隷である茶碗の家來である此の茶碗
 の働きを現はす爲にティーブルを置いたゞけてはならない此の水差しは何の爲め
 である此の茶碗の働きを現はす爲の機械でしか無い茶碗に水差し盆やテ
 ーブルがあつても其れだけでは未だ茶碗の働きを現はすことが出来ぬそこ

て大内青黴といふ人間を雇つて來て饒舌らせる茶碗の働きを現はすが爲
 に大内青黴が饒舌つて居る大内青黴に饒舌らせるために諸君は此の教場
 へ集つて聞いて居る即ち諸君も此の茶碗の働きを現はす爲に茶碗の命令
 を受けて徴集されたのである諸君を此處へ置くが爲に此の教場が出来て
 居る此の教場を置くが爲に此の地球が出来て居る此の宇宙は何の爲めに
 出来て居るかといへば只此の茶碗の働きを現はすが爲に出来て居るとい
 ふことになる或は又此の水の働きを現はすが爲に此の茶碗があるのであ
 るといふことになれば水が宇宙萬物の主宰である水がゴッドである水が昆
 盧遮那如來である此の白墨から見た時には宇宙萬象皆此白墨の働きを現
 はす爲めのものとなる是に至つて天地萬物の體と相と用といふものが明
 かに我々の心の中に得心が行つて疑が晴れたならば佛法の能事畢るので
 あります然るに其の宇宙萬有が持ちつ持れつ助け合つて働きを現はして
 行くといふに付けては如何なる手段を取るかといふ事が此の次の問題で

ある、今までの所は宇宙の實相を其の儘に觀察したゞけのことでありませうけれども、それを我々人間の働きの上に持つて来た時には、即ち行といふことが起つて来るのである、其の行といふことが更に又三つに分れて来ますから、其れを三行といふのであります、先づ是れまでの處は三信の大體を御話いたしたので、此上には本文に付て御話し致します。

是から三信の本文の御話、唯今御断り申した如く大體を御話申して置いたのでありますから、是れからの文字に付ての御話は、極めて一氣呵成に略して三信と一緒に御話したいと思つて居ります。

第一の信

吾人は無限の空間に充塞し、無限の時間を通貫して、宇宙平等の本體たる、絶對不變の靈光あることを確信す。

是が體相用の中、體即ち宇宙萬象の本體を申したのであります、基督敎などの人は常に何を言つても先づ神の有ることを信じませぬければ、其の後のことは皆無駄事となつてしまふといふ風に言ひます様であります、誠に尤

天地は萬物の逆旅

なことであります、佛敎に於ても其通りのこととて、何を申しましても先づ此宇宙の本體といふことが信ぜられぬければ、あとは皆枝葉のこととてありますから、どれ程に利口振つて見てもどんな豪いことをしたやうであつても何の所詮も無いことになるのであります、其れ故に三信といふ中に付ても本體を信ずることが一段と肝要なことであります、文字の上には於ても無限の空間に充塞し、無限の時間を通貫して、其の體の廣大無邊なる有様を示す爲に、近頃では學者連中が頻りに空間時間といふことを言ひます、これを何か西洋舶來の珍しい言葉のやうに思つて居る人もある様子でありますけれども、これは何もそう珍くも無い新しくも無いこととてありまして、随分支那あたりの古い學者連中は幾らも言つて居ります、皆さん御承知でありませう、中學あたりの教育を受けた頃に、御馴染の夫天地者、萬物之逆旅、光陰者、百代之過客などと言つて居るのは、皆此空間時間の觀念を言ひ現はしたので、此天地といふのは萬物の旅籠屋である、即ち空間的に見たのである、又光陰

といふのは百代の過客其旅籠屋に泊つて居る御客様のやうなものであるとこれは時間的に言ふたのである東坡が赤壁賦を書いても渺滄海之一粟哀吾生之須臾とある滄海というて廣い海の中に誠に微かな五尺ばかりの身體といふものは粟粒の流れて居るやうなものであるといふたのは空間的に言つたのでそれがどれ程の命を持つか吾生の須臾なるを哀むと言つたのは即ち時間的であります何か物を言ひ出す時になると自づから空間時間の觀念といふものが起つて來ますのは決して西洋舶來の珍しいことでは無い釋迦如來の御流義では此の意味をも矢張り一番最初に言はれて居る佛教では妙な辭を以て之を言ひ顯はして居ります

十方三世

斯の十方と云ひ三世といふのが即ち空間時間の無限なことを言ひ顯はしたものであります一體に諸君は空間時間が無限であるといふことに付て私の説明を御聴きなされる必要は無からうと思ふ先づお互ひに彼の太陽を

見ても其の太陽の仲間である恒星とかいふのが此の晴れた夜の空を見ると針の孔程に光かつて居るのが幾百萬あるとも分らない普通一通り理學者の言ふのを聴いて見ましても我々が地球から太陽まで行くのにどれ程の時間が掛かるかと言ふたら一日に日本里數で百里を走る速力の汽車に乗つて千年掛らなければ太陽まで行けないさうです大變な騒ぎだ人間の命は僅か五十年であるとするれば孫の孫の二十代も経たなくては一日に百里づつ晝夜兼行して走つても行けないといふ話である彼の針の孔を見たりやうに見える恒星の内でも最も我が地球に近き所の星がどうであるか専門學者に其の講釋を聴きますと我が地球から太陽へ行くのより六十萬倍程遠いといふのが一番に近いのださうであります前の勘定で行くと太陽まで行くのに千年掛かるとすると六億萬年掛らなくては行けないといふそのやうなのがマア一番近いのだから遠いになつては到底勘定も測量も出來ないといふ話である此の空間が限りが無いとしたならば其の空間の生

命はどれ程あるかと言ふに、空間に限が無いのであるから其時間限りが無いといふとも自然に分るのである、それを佛法の専門語では簡略に十方三世と申すのであります、十方といふとは、此所へ一本此白墨を立て、見れば縦が二寸五分、太さが直径五分程の丸いものである、即ち此の白墨には限りがある、然るに此の白墨より東の方がどれ程ある、西の方がどれ程あるかといふと西も東も限りは無い、北も南も限りは無い、又其の隅々も上も下も皆限りが無い、此の白墨には二寸五分とか三寸とかいふ限りがあるけれども、其の四方四維上下の十方、即ち白墨の周囲の空間には限りが無い、そこで十方といふ二字で宇宙の廣大なることを充分に言顯はしたのであります、又三世といふことは時間を示したもので、過去と現在と未來、過ぎ去つた時間、今の時間、未だ來らざる時間、それを三世といふ、世といふ言葉は世は遷流の義と申して、段々と遷り流れて行くの意味合である、其遷り流れて行くのに其時間が三つに分れる、どうして三つに分かれるかと云ふに、こゝに何も

時間の無

物が無つたならば十方といふ名も無い、こゝに有限の物があるから其れを中心として十方の無限といふことが現はれる、今時間も亦其の通り此處に斯う云ふ物を出した、これを出さない前の時間はどれ程あつたか分らない、ゴッドに聽いても説明が出来ないかも知れない、さて又私が之を出して居る間は二分とか三分とか乃至一時間でも二時間でも其れには限りがある、然し之を引込めてしまふた後の時間はどれ程あるてありませうか、それも決して説明が出来ない、即ち無限である、最初から此處へ此物を出さなかつたならば元と元と限りの無い時間である、元來時間といふ名も無いのである、然るに已に此處へ此物を出せば之を出さない前と引込めた後と之を出して居る間と三つの時間が立つて來ますから時間といふものに實體のあるのでは無くて、空間と同じく有限の物に依つて暫らく空間時間といふ觀念が起つて來るのであります、其の物に限りがあるに依つてそれに對して暫らく無限といふ言葉を使ふたのでありますから、無限の空間に充塞し無限の時

間を通貫する即ち此の限なき空間に有りとする物の其本體になつて居るものは此處から此處までといふ限が無い、又其の時間に何時から何時までといふ限が無い、それはどういふ品物かといふとそれが即ち宇宙平等の本體である絶對不變のもので、宇宙間に有りとならゆる物柄事柄の總ての物に平等に行渡つて居る本體となるところのものである、其の物は如何なるものであるかといふと絶對である、絶對といふのは此れに向ひ合はうて居る相手になるものが無いといふことであります、基督教の神様も基督教では絶對と言ふのであるそうですが、佛教から見ますれば其の神様は絶對とは言はれません、何故かといふと、造つた神様と造られた萬物と向ひ合つて居る神様其の儘に萬物と云ふならば絶對であります、造つた御方と造られた物とが互に幾分づつ別々に空間を占めて居るといふ勘定になりますから、佛教では之を眞の絶對とは許しませぬ、今こゝで絶對と云ふのは其れとは大に違ひまして、宇宙萬象其の儘に其の本體の平等なる所を絶對とい

絶對

不變

靈光

ふのでありますから、此の本體の外に萬物があるとは申さないのではありません、さて又不變といふは讀て字の如く變らないといふ事であり、變らないといふのは無限の時間を通貫するのであります、若し限りがあるとしたら、今は斯うなてあるけれども後には斯うなる昔は斯うであつたが今は斯うなつたといふやうに、即ち過去から現在、現在から未來と三世に渡つて物の姿形に變遷が出来て参ります、それが即ち變るので不變の反對であります、然るに今は不變であるから決して變るといふことが無いので無限の時間を通貫すると言つた、さう云ふやうな廣大無邊なるものは一體如何なる者であるかと言へば、何とも言ひ様の無い不可思議微妙なものでありますから、其不可思議微妙なる有様を形容して暫く靈と言ふた、其不可思議微妙なるものは如何なる働きを持つたものかといへば、其れも亦何とも言ふことが出来ぬから、暫く假に光といふ字を以て靈光といふ文字を下したのであります、即ち天地萬物有りとならゆる物柄事柄の大源となり根本と

なる一種の言ふに言はれぬ働きを假りに暫く絶對不變の靈光と名づけたのであります、其の絶對不變の靈光なるものが種々なる因縁に依つて或は山ともなり川ともなり植物とも動物とも乃至人間ともなつて居るから前に申した如く花の咲くのも絶對不變の靈光の現はれた姿紅葉の散るのも絶對不變の靈光の現はれた姿總てのもの皆靈光の現はれたのであると信ずるのであります、それであるから佛教では宇宙萬象の外に別に佛とか神とかいふ者があるといふのでは有りません、天地萬物總ての物の本體を名けて或は眞如と言ひ或は法性と言ひ、それに生命を付し尊號を加へて法性法身の阿彌陀如來とか久遠實成の釋迦牟尼如來とか、大日如來とか盧遮那佛とかいふ名を附けるのでありますから、宇宙萬象の外に神だの佛だのがあるのでは無い、宇宙萬象の靈妙なる働きを名けて、且らく佛とも神とも名けたのであるといふとを一番最初に先づ堅く信じて疑を晴さぬければならぬのであります、是が即ち第一の信であります、次は第二の信、即ち相てあ

何物も佛の本體
活動して居る

ります。

吾人は宇宙平等の本體活動して萬象差別の現相と成り、因縁相續して世界の果報歴然たることを確信す、前に言つた宇宙平等の本體所謂絶對不變の靈光といふものは元と元と是が活動して居るのであるから、其活動の有様を説明するのが此一段の目的であります、從前の佛教の専門語と違へて成るだけ世間の言葉を以て言ひ現はしたいと思ふので斯様な文字を使つたので、乃ち宇宙平等の本體活動して萬象差別の現相となる、前段で肝要な文字は本體といふ二字でありましたが、此第二段に於て肝要なのは現相といふ二字であります、現相とは現在目前に見えて居る都べての事物の姿でありますから、山となり河となり草木となり禽獸蟲魚となり、千差萬別に現在の姿が見えて居る、一味平等の本體がどうして斯う千差萬別になつたのであるかと云ふに、絶對不變の靈光は常に活動して居るものであるからである、其れが何時から活動し始め

活動

たかといふに、本來無限の空間に充ち満ちて無限の時間を通貫して居るのであるから何時からといふことは無い、何時からといふことがあれば無限の時間では無い、元と元と無限の時間を通貫して居るのであるから何時からといふことは無い、之を佛教では暫く假りに名けて無始と申します、宇宙萬象の本體は無限なものであります、前も後も無く始も終も無く活動しつゝあるのであります、其の活動の有様を因縁と申すので即ち因縁に依つて現相を現はし、其の因縁が相續し轉變して千差萬別の果報を現はす、此の因縁相續といふことに就ては、屢々此處で御話をしてあつたと思ふ、御聞きになつた方は御記憶があるかも知れませぬ、火の輪或は水の輪を以て御話してあつたと思ふ、此の東京を中斷して流れて居る墨田川といふ川がある、然るに此の川に實體は無い、暫く水と水とが互に因縁相集つて假りに川の相となつたゞけのものである、乃ち墨田川といふ實體は無いけれども、其の水と水とが集るといふ因縁が後へ後へと相續するに依て、確かに墨田川とい

因縁相續

ふ形所謂現相が現はれて居る、宇宙萬象皆其通り唯暫くの因縁に依て成立つものであるから、實體があるとは言はれないけれども、其の因縁が相續する邊から亦其の實用を失ふとは言はれない、即ち此の因縁と相續といふ言葉を以て宇宙萬象の生死起滅する様子を悉く説明するのでありますけれども、今は時間が足りませぬから、委しい御話は出来ませぬ、若し之を委しく御話するには、六因とか四縁とかいふ説明の仕方もある、因といふことに就て六箇條縁といふことに就て四通りの箇條を立て、説明したり又其の因縁相續の仕工合に付ても色々説明の仕方があります、其の邊のことは總て他日に譲つて置くのであります、それで世界の果報歴然たり、此の世界の界の字は大抵誰でも何の意味とも分らずに、一つの普通名詞のやうな工合になつて世界々々と言つて居るやうであります、佛教の上で説明しまする時には、世といふのは時間的に言ふので、界と云ふのは空間的であり、ます世は遷流の義といふことは前に申したと覺えて居ますが、此の界の字は

區境界などいふ時の義であつて、芝區とか麻布區とかいふ區の字と熟字して境界の義になりますから、界といふことは空間的の意味であります。そこで世界といふ二字で限ある時間限ある空間といふことを言ひ現はすのであります。因縁相續して箇々の限ある時間限ある空間に現はれた姿を名けて果報といふのであります。此の果と云ひ報といふことに付ても、或は果の上に三果と稱へて三通りの箇條を立て、説明することもあり、報の上に付ても、二報と申して、二通りの箇條を立て、御話するやうな場合もあり、すけれども、それも今は御預りとして、兎に角に天地間に有りとあらゆる物柄事柄、花は紅葉、紅葉は紅葉、山は山河、河は河、皆確かに歴然たる時間と空間とを持つたものが現はれて居るのである。是れがどうして現はれたかといふに、皆それ々の因縁に依つて暫くそれ々の異なつた果報が現はれたのである。然らば其の因縁といふことは何であるかといふに、本體無始の活動であります。それは無限に活動して行くのでありますからして、其の因縁が悪い

因縁であり、ますると悪い果報を現はして来る。其の因縁が悪い因縁であれば、善い姿を現はして来る。然し其の善いとか悪いとかいふことは何を標準として言ふか。畢竟我々人間の上から言ふた話で、本體其物に於ては善くも悪くも無いといふことは例へば鐵の如きものであると云ふ御話をしたと覺へて居る。鐵といふものゝ本體の上から申すと鐵といふものは切れるが善いとも切れないが悪いとも言へない。去りながら刀になつた時には切れないければならぬ。火箸になつた時には觸れば切れるといふ様では火箸が火箸の用をなさぬ。火箸となつた時には切れない方が善い。刀となつた時には切れる方が善い。善い悪いのといふことは暫く現相の上で言ふ話で、本體の上からは孰れが善い孰れが悪いといふ譯は無。畢竟我々人間の上に付て都合の好いのを善と云ひ我々人間の上に都合の悪いのを悪といふ。さてのことてあります。絶對の善、絶對の悪といふものがあるのでは無い。善と悪とは相對のものであります。尤も或る教相の上では性善性悪といふこと

を申しますがそれは又別論であります。第二の相のことは先づ此位にして措いて次には第三段に用の信であります。

第三信

吾人は萬象の妙用各其本徳を全して互に相感應するときは即ち差別の現相直に是れ平等の本徳たることを確信す。

前に申した所の現相の上では、一つも同じ姿の物は無い、皆悉く差別のもの、でありますが、然るに其の別々な物には前に御話し申した如く水瓶には水、瓶の働さがあり、徳利には徳利の働さがある、花は花、紅葉は紅葉、各々其働さがある、各々持つた働さ、各々其の本徳を全うする、本徳と云ふのは天性具へた働さを名けて本徳と言ふので、例へば水が物を濡すが如き、火が物を焼くが如きを本徳と申します。此の本徳といふ字か佛の上では本願といふことになる。本願といふのは元と元とからの理想といふことであります。佛の元と元と天性は何であるかといふと佛となる最初の時から衆生を濟度するといふことが其の目的であります。其の佛の心に最初から衆生濟度と

本願

いふ理想があつて佛になつたのであるから、其の佛の心を名けて直に本願と言ふ。今水といふ物が水の姿を現はすに付ては水は酸素と水素とが化合して出来たもので、其の酸素といふものは物を濡らすと限つたものでは無い、又焼くとも限つたものでは無いけれども、火となつた時には物を焼く働さとなり水となつた時には必ず物を濡らすのである。即ち本體の上では同じであつて水となつた時には水の本徳があり、火となつた時には火の本徳がある、明晃々たる金剛石も真黒な炭團も理學者に聴いて見ると同じ純炭素だといふ話だ。純炭素であるといふならば金剛石を持つて來て風呂の湯を沸かしても宜い、勘定又は炭團を指環に籍めて置いても宜いわけであるがさうは參らぬ、何故かといふに其の物の本徳即ち働さが違ふ、同じ純炭素だけれども其の因縁に因て明晃々たる金剛石とも現はれ、真黒なる炭團とも顯はれる、已に炭團となつた時には炭團だけの本徳を持つて居りますから、各々其本徳を全うして水は水、火は火の本徳を全うして缺目が無く、其れ

が互に相感應する此の事は禪宗の祖師が萬物自ら功あり當さに用と處とを言ふべしと言はれた言葉があるが總ての事に自らそれの機能があら其の功能といふものは其の物は本徳の働きと其の働く場所とあると申すのであります水と火といふ様な物は元と同じ酸素であるから兄弟どころでは無い全く同じものだけれども既に萬物自ら功ありて水は水の功があり火は火の功がある各々其の本徳を全うしつゝ互に相感應する時に若しも其居場所を誤りまするといふと大變な間違が起つて來る下に火があつて上に水がある其の間に土瓶のやうな仲立があつた時には其の火は火の働きをする水は水の働きをする其の儘に互ひに感應して御湯でも御茶でも出來ますが若し其れがアベコベに何も仲立なしに火の上に水が打ツ突かると火の方は消えて水の方も乾いてしまふ又たとへ仲立があつても居場所を變へて土瓶を下に置いて上に五徳を置いて火を載せるそれでは何時か湧くことは湧くか知りませぬけれども湯を湧かす法では無い互

に用と處とを誤らぬやうにして何處に在つても目は見ませう何處に在つても耳は聞えてありませうが矢張り人間並に目は横に裂けて居つて其の隣の方に耳は堅に付いて居る其の方が格好が宜いといふやうな工合であります自然に其の方が目の働きも仕易い都合もありませんといふ様な譯でどのやうな姿をしてどんな働きをしても構ふことは無いといふ譯のものでは無い即ち我々の一家の上に於ても主人は主人家來は家來親は親子は子と秩序整然としてさうして互に相感應する處が無ければならぬ一家の親子兄弟夫婦相集つて家庭團樂として平和の快樂を作つて行くといふ場合に於て親も子も皆平等一味では無いかといふので親の坐る處へ子供が坐り込んで髀を拵つて居る親が下に居つて手を突いて居るといふやうては一家の平和は得られない親は親の處へ坐わつて親らしい面をして居る子供は子供の坐る處へ坐つて子供らしくして居るそれ何親が豪いといふ譯では無い子供が詰らぬといふ譯でも無い其儘が平等一味で

ある眉毛が上に居つても威張つて居る譯では無い髯が下に居つても謙遜して居るといふ譯でも無い、上のものは上に、下のものは下に、其儘が一味平等で貴賤高卑の差別は無いと言つて餘り仲好くなり過ぎて眉毛も口髯も一緒になつては熊の顔のやうな顔になる、お三どんが臺所で飯を炊いて居る、旦那様は馬車に乗つて出掛ける、何もお三どんが詰らなく旦那様がえらいといふ譯では無い、お三どんのチョツとの失錯で旦那様が詰らぬことになることもある、一家のことも一身のことも宇宙のことも皆其の通りである、即ち萬物皆悉く其の本徳を全うして互に相感應する、此の感應といふことは佛教で始終使ふ言葉であるが、手近く申せば打てば響く、打つといふ事と響くといふこととは一つとも言はれねば二つとも言はれない、我が目は此處にある月は空にある、空の月と我目とが感應しない時には、今宵は満月のはずである、十五夜のはずであると思つて居るから、外を散歩して来た人に向つてどうだい、外はどうだか知らない、今夜は月が好からうと思ふが、ウ

ム好いかも知れねえ、それでは少しも感應がない所が外を散歩するまでに及ばない、書齋の窓を明けて外を見てどうも好い月だな、月がこちらへ来たのでも無い、こちらから月の處へ行つたのでも無い、けれども空に澄み渡る儘に書齋の窓から顔を出した儘

月やわれわれや月かのわかぬまで

こゝろも空にすめる秋の夜

是は亡友の成島柳北の歌であります、月やわれわれや月かの分かぬまで、月が我であるやら我が月であるやら其の差別の分らなくなるまで、心に澄める秋の夜、己の心と空とが一致してしまつた時に、此の我と月とが一つとも言はれねば二つとも言はれない、別々の儘が一つで、一つの儘が別々である、差別即平等、平等即差別、之を般若心經といふ經文には、色即空、空即色、と云うてある、即ち萬物が別々な姿を以て別々な働きをする、其の別々な儘、一つとも二つとも言はれない働きの起つて来る時が、即ち互ひに感應

差別即平等

した時であります。我々一家の上でも一身の上でも其の通りであります。頭の足だの手だの骨だの肉だの皮だの筋だの相互に感應して本體を全うして居る時が我々十分健康な時であります。それが破れた時が御醫者様の厄介になる時であります。一家でも一國でも宇宙でも同じこととあります。斯うなつて來ると、差別の現相即ち是れ平等の本體といふことを我々は信じなければならぬ。差別の儘が平等の本體本體其儘が我々の姿となつて現はれたものであるから、我々がする事爲す事が宇宙萬象と感應道交するやうに働いて行つた時を、我々は之を名けて佛といふ。即ち佛の姿が我々の上に現はれて來て居るのでありますから、我々が佛になり佛が我々になる。即ち我々人間ばかりで無く、山川草木總て皆悉く佛陀の大光明となつて來なければならぬ。然らば此の本體を全うしつゝ、感應させるには其の方法はどうしたものかといふ事に至つて、初て次の三行といふことが起つて來るので、此處までの所は所謂理窟でありますから、前申した如く釋迦如來が言つ

佛敎の特色

ても言はないでも本體は本體であります。現相は現相であります。本體其儘現相現相の外に本體が無いといふことを認めて、それを我々が實地朝夕の行ひの上に應用することを教へられたのが釋迦如來であります。其れ故に今の三信の上に付て第一の信即ち本體と第二の信即ち現相に付ては御釋迦様の御厄介にならないでも、何れ智識が進んだら此處までは行くはずでありませうが、唯此の第三の妙用といふことだけが釋迦如來の專賣特許版權を取る所であると、斯う私は信じて居ります。それで此第三の信を實行する方法として次の三行といふことが現はれて來ます。

第三章 佛教の實踐

信行綱領の本文たる三信三行の御話前回到三信の御話は甚だ不充分でありましたが一通り通りしましたのでございませす更に要を摘んで申して見ますれば宇宙萬象世の中あらゆる物柄事柄は千差萬別のもので一つも同じ形の者は無いそれが因果報の然らしむる所其の因果の違ひに依て各々果報が千差萬別の姿をなし千差萬別の働きをして居るものである之を佛教の言葉では相大と申します此の信行綱領にはそれを現相というてあります世間の學問の言葉で言へば現象といふのであります佛教の言葉で相の字を使つてありますから現相と名づけてあります然らば其の千差萬別なる宇宙萬象の現相は一つも同じものは無いけれども其の本體は如何なるものであるかと言へば本體は平等一味にして差別なきものである即ち無限の空間に充塞し無限の時間を通貫して絶対不變のものである其の

三信の概

絶対不變なるものが活動して因果報の然らしむるまゝに千差萬別の姿と現はれるのでありますから本體は平等であつて現相は差別して居るのである然るに其の差別の現相に執着して宇宙萬象あらゆる物柄事柄は皆別々に孤立するといふことになりますると其の物々の眞の働を皆失うてしまふそれで本體の平等なるところを能く認めて其の平等の本體に適ふ様に働いて行くといふ事が肝要になつて来るさうするにはどうするかと言へば互に持ちつ持たれつ助け合つて行くといふ事が大切になつて来るそれを名づけて妙用といふ妙は不可思議の意味でありますから妙用といふは不思議なる働きといふことであります之を我々の極めて手近き所に例を取つて見れば我々一個人として見ても皮肉骨髓四肢五官皆悉く別々なもので目が耳の働きもせぬければ耳が鼻の働きもせぬ骨が肉でも無ければ肉が皮でも無い手が足の働きもせぬければ足が手の働きもせぬ皆悉く別々のものである即ち皮肉骨髓四肢五官といふ上から見れば別々な

ものであるけれども、之を俗に身體といふた時になれば頭も足も肉も皮も皆身體であります、其の邊から見れば平等一味にして何れを別に取るべきこともなければ別に捨つべくも無いことになる、即ち身體といふ平等一味の本體を忘れずに頭は頭、足は足、手は手、腹は腹、脊は脊とし、別々の働きを互に持ちつ持たれつして其の間に少しも差障りが無いのが健康體であります、一家の家庭に於ても其の通りの事て夫は夫妻は妻、親は親子は子、兄弟は兄弟皆悉く別別であります、其の別々なものが皆悉く個々別々に分れて各々自分勝手な働きをするようになったら、一家を作すことは出来ません、勿論親子兄弟夫婦皆別々であるに依て、兄が學問をしたから弟が伶俐になるといふ譯にもゆかず、お三どんが一杯餘計飯を喰つたに依て權助の御腹が餘計膨れるといふ譯にもゆかぬ、皆別々に相違ない、然るに其の別々な者が別々な働きを作しつゝ、一軒の家庭といふものゝ精神が互に持ちつ持たれつ助け合はうて行く間に、多くの人が集つて一つの働きをするのである、即ち

一家といふたのは平等の本體である、親子兄弟夫婦といふたのは差別の現相である、其一家といふことを忘れずに親子兄弟夫婦別々に働くまゝ、その持ちつ持たれつ助け合はうて行くのが妙用である、之を國家の上から言つても其通りで推して知らるべきはずであります、さうしまするといふと此の本體は平等であつて、現相は差別なものであるといふとを觀察するのは、或は宇宙觀とか人生觀とかも言うて居る學者もありましやうが、又耶蘇敎は耶蘇敎の觀察の仕方があり、哲學者も其の人に依て色々觀察の仕方がある、さて釋迦如來は之をどう觀察せられたかといふに、本體の外に現相は無い、現相其の儘が本體である、言を換えれば色即是空、空即是色とも言ふ、又は平等即差別、差別即平等ともいふ、別々の儘が一つで一つの儘が別々、現相の儘が本體、本體の儘が現相であるといふのが今の學者の言葉で申すと、釋迦如來の宇宙觀とか人生觀とかいふのでございませう、それは御釋迦様がさう言はないでも、さうに違ひない、火といふものは誰が言つても言はないでも

熱いものだ水といふものは誰が言つても言はないでも流れるものだ電気といふものは誰が發明しなくても電気だ蒸氣といふものは誰が發明しなくとも蒸氣であるさうしたならば本體は平等にして現相は差別であるといふとは釋迦如來が發明せられたに依てさうなつたといふのでは無い、それでありますから此の本體と現相との二つは別段に教にも論しにも何にもならぬ學問の部分に於て釋迦如來がさう達觀したゞけてさう承はれば成程と云ふまでのものである、その説に賛成すればそれで済む御同意せられたら宜いといふ話になる、今此の佛教といふ釋迦如來の教が立つて來まするのは何處であるかといふに其の本體の觀察の上で立つのでは無い、現相といふ研究の上で立つのでも無い、第三の妙用といふ一箇條の上に於て教になるのである、其の妙用は前に申した如く別々なものが互に持ちつ持たれつ助けあうて行く、其の持ちつ持たれつといふのはどうすれば助け合ふことが出来るかといふ事だけが教になるのである、佛教の佛教たる所以

のものは何處にあるかと言へば本體現相妙用といふ三信の中の第三の妙用一つにある、それでは行といふものが起つて來ぬければならぬ、今までの所はさう云ふ道理であると我々の心に確かに受取つて疑が晴れたならばそれで宜い、それが即ち信といふ部分であります、信の字に付ても仰信とか解信とかいふやうな差別もありません、けれども其んな事は御預りとして兎に角さう云ふ譯かといふことが我々の心に受取つて疑が晴れたならば済む、然かし疑が晴れたから其れて實地行はれたといふ譯では無い、腹が減つた時に飯を喰へば飢は凌げるといふ理屈は確かと受取れば疑は晴れたに違ひない、其の時に腹が膨れたか、まだ膨れない、さうすれば飯を喰ふにはどうすれば好いか、其の喰ひ方が即ち行であります、其の喰ひ方が即ち佛教といふものでありますから、其れを今は三行といふのであります。

三行

吾人は凡そ止惡轉迷の規律皆普て之を實行す

吾人は凡そ修善開悟の道法皆誓て之を實行す

吾人は凡そ濟衆救世の事業皆誓て之を實行す

是だけてございます佛敎といふものは前の三信の中の妙用を實地に履踐する其の履踐の仕方の外はありません極めて平易に此の本文だけを讀んで見ますれば我々御互は總ての事の上にて惡を止め迷を轉ずるといふ所の規則法律皆悉く誓つて之を實行するのであります御釋迦様が言はれたからといふにも限らず耶蘇基督が言はれたからといふにも限らない凡そ世の中のありとあらゆる惡い事は止めるが好い迷は轉ずるが好いといふ方面に向つて立てられて居るものであつたならば國家の法律規則にもせよ聖人賢者の敎にもせよ乃至耶蘇とかマホメットとかいふ宗教の祖師達の言はれたことにもせよ何でも其れを實行し様といふのが第一の箇條であります其の次は吾人は凡そ修善開悟善を修め悟を開く前の止惡といふのがモウ一步積極的に進んでゆけば修善となる惡いことをさへしなけ

れば宜いといふものではない、モ一つ進んで善を修むることが無ければならぬ迷を轉じさへすれば宜いといふのでは無い悟を開くといふ所へ積極的に進んで行くことがなければならぬ其の修善開悟に付ての道徳だとか方法だとかいふことであつたならば誰が言ふたのでも誰が立てたのでも構はぬ敢て釋迦の敎だけに限つたことではない如何なる人の敎であつても皆悉く誓つて之を實行しやう斯う云ふのが第二の箇條である然るに此の惡を止め迷を轉ずる善を修め悟を開くといふことは何の爲にするのであるかといへば其れが中々の大問題であります世の中に惡い事をしてはならぬ善い事はせねばならぬといふことが誰とも言ふ然るに何故惡い事をしては惡いか何故惡い事は止めねばならぬかと問はれた時には何と答へますか惡いから惡い、それでは答にならぬ惡いから惡いでは理由にならぬ何故惡いのであるか何故止めねばならぬか又善いことをする何の爲に善い事をするか善いから善いでは道理が分らぬ、それで段々之を詮議し

て見ますると先づ大抵は己れに都合が好いからといふやうな事になつて居まじやう、悪い事をするに自分都合が悪いからしない、煎じ詰めて言へばさうだ、それより下つたものはどうであるかといふに何だか世間の人が悪いと言ふからといふので人の御供をする人がナニニ構ふことは無いといへば、實は己れもさう思つて居るといふやうな事になる、自分の都合を善悪の標準とするといふことは少しも當てにならない、善い方をするのも其の通りの事である、何故善いことをせねばならぬか、どうも善いことをした方が差引勘定損が無いやうだ、斯う云ふのは算盤の上から來た善悪の標準である、其れは誰がそんな事を言つたかと云へば皆がさう言ふ、イヤ此の頃ではそんな事は流行らぬ、昔はさう言つたか知らぬが今ではそんなことは流行らぬ、さうかそれでは考へて見やうといふやうな事になる、何事も皆我といふものを標準にして居る前の喩へて言つて見ても目は目だけの都合、耳は耳だけの都合、骨は骨ばかりに固まつて肉も皮も無いといふことになつては、獨體になつてしまふ、それかと言つて肉だけといふと骨が無いから、藟藟のやうになつて、何だか知らぬダブダブの豚のやうな太つたものが出來て、諸君の御厄介にならねばならぬやうになる、己の都合といふことが標準となつて行つたのでは、佛教の上には於てはそれは善も善とは許さぬ、惡も惡とは認めない、己一人だけの話である、然らば何の爲に悪い事をしてはならぬか、何の爲に善い事をせねばならぬかといふに付て、第三に吾人は凡そ濟衆救世の事業皆誓て之を實行す、衆を濟ひ世を救ふ前に申した如く互に持ちつ持たれつ助け合ふといふ事業は即ち多くの人です、世は即ち世間です、此の多くの人を濟ひ世の中を救ふといふ中には自分も必らず這入つて居ります、自分を其の中から除く譯にはゆかぬ、然るに自分一人の勝手といふことになれば却つて妙なことが起つて來る、己の家さへ火事を出さなければ宜い、己の家だけ傳染病に罹らなければ宜いといふ風である、どうも此頃は火の用心が悪い、近所に悪い者が立廻はる、泥坊が這入るかも分ら

なつては獨體になつてしまふ、それかと言つて肉だけといふと骨が無いから、藟藟のやうになつて、何だか知らぬダブダブの豚のやうな太つたものが出來て、諸君の御厄介にならねばならぬやうになる、己の都合といふことが標準となつて行つたのでは、佛教の上には於てはそれは善も善とは許さぬ、惡も惡とは認めない、己一人だけの話である、然らば何の爲に悪い事をしてはならぬか、何の爲に善い事をせねばならぬかといふに付て、第三に吾人は凡そ濟衆救世の事業皆誓て之を實行す、衆を濟ひ世を救ふ前に申した如く互に持ちつ持たれつ助け合ふといふ事業は即ち多くの人です、世は即ち世間です、此の多くの人を濟ひ世の中を救ふといふ中には自分も必らず這入つて居ります、自分を其の中から除く譯にはゆかぬ、然るに自分一人の勝手といふことになれば却つて妙なことが起つて來る、己の家さへ火事を出さなければ宜い、己の家だけ傳染病に罹らなければ宜いといふ風である、どうも此頃は火の用心が悪い、近所に悪い者が立廻はる、泥坊が這入るかも分ら

ぬ、それを入れないやうにしなければならぬ火を附けられないやうにせねばならぬと己一人て寝る目も寝ずに宵から朝まで終夜家の周囲をグルグル廻つて火の番をして歩いて、それで安心が出来ませうか、隣の家からランプを引繰り返して燃え出したといふ場合になつた時に己の家とは關係が無いはずだといふ事が出来ませうか、それよりは村中に火事災難が無いやうに村中に悪い病氣などの流行らないやうに、どうも近頃は世の中が不景氣なので悪い者が立廻はるさうだ、村中で一つ御互に持ちつ持たれつ村に災難のないやうにといふ事でありましたならば火の番をすべきものは當番をやつても宜しいし、或は身體が丈夫で其う云ふとに經驗のある巡査あがりの者を雇ふとかいふやうな、それを専務にやつて呉れる人があれば、御互に夜中炬燵に潜り込んでユツクリ高駒で寝て居ても村中は安全である、此の村中といふ内には自分の家も必ず外れッことは無い己の家だけといふては隣から火事が出るかも知れない、即ち濟衆救世といふ中には己も無

論這入つて居るといふ事が分る、御互に此の如くに村中安全國家安全、モ一一つ進んで宇宙全體の安全を謀るといふに至つて初めて宗教の本分になるのであります、手近く言うて見れば我々一身の上からも一家の上からも皆悉く總ての悪いことはしまい、總ての善い事はしやうぞ、總て多くの人の爲になるやうにと斯ういふ三箇條の道徳を實地に履踐する、是が即ち佛法といふもので、此の外に佛法といふものは決して無いのであります、是て先づ本文の言葉だけは一應話しが済みました、更に進んで之を御話しなすに付けては第一に善惡の標準といふとが一大問題であります、善と云ひ惡といふことは一體何を標準とするのであるか、斯う云ふ議論が起つて参ります、此の事は近頃では教育家就中倫理學を専攻する人々の間には、サカナカ議論がある様子であります、諸君も随分御調べになつたこととてございませうが、善惡の標準といふ事を話すに付けては、モ一一つ溯つてと言ひましやうか、又は退いてと申しますか、兎に角異つた方面から一つ御話して置か

ねばならぬことがあります。

一體は佛法と申しますものは前申しました如く、本體の上や現相の上から申しますれば宇宙萬象世の中にあるとあらゆる物柄事柄の上に付て觀察をするのでありますけれども、第三番目の妙用の上に於ては、是も宇宙萬象總て同じ道理ではあるけれども別して我々御互人間の爲に教を立てられたものであります、尤も犬にも猫にも此の道理はある、木や草にも此の道はある、ある位では無い、彼等は實地に持ちつ持たれつの様子は、日月星辰互に相聯絡して居る點だけでも諸君は御承知であらう、如何せん我々御互人間は彼山川草木の心の無い物の如く正直にゆかない、殊に今は我々人間の形を禀け人間の心を持つたもの、爲に釋迦如來が教を立てられたのでありますから、人間を地盤として立てられたのであります、それで善とか惡とかいふことも人間の上の話であります、之を溯つて前の本體即ち三信の本文とすると、第一番の段階に無限の空間に充塞し無限の時間を通貫して

宇宙平等の本體となつて居る絶對不變の靈光といふ上から見ましたならば、本より善惡といふものは無い平等の本體であるから、是には善惡もなければ長短も無い大小も無い無いと同時に生れもせねば死もしない迷もなければ悟も無い、それが種々の現相に現はれた時になつても平等の本體の其の儘に形となつて居るのでありますから、現相の上から見ても其の物の上手前から言ふたならば、此處に急須があつても茶碗があつても其の物の上から見たならば善惡邪正といふものが無い、我々人間から見れば善いとか彼れは惡いとかいふに過ぎない、それで早解りするのには此處に林檎があり、梨子があり、柿がある、此の柿だの梨子だの、林檎だのといふ物が大層に美しい、我々人間が見ると大層うまさうである、今が丁度喰べ頃だ香が芬々として如何にもうまさうだ其のうまさうだといふのが林檎其の物の方ではどうでありませうか、うまさうだといふのは人間の言ふたことで、林檎の手前では甘さうても辛さうてもない、うまくもまづくも何とも無い、況や林

橋其の物の方では未だ目的は達せられて居らないのである、何の爲に斯んなものが出来たか自分の相續者あとに林檎の種子を蒔く爲に出来たので、人間共に喰はせやうが爲に出来たのでは無い、内に含んで居る種子が地へ落ちて、雨露水土の縁を假りて己の元の如き姿のものを更に作り出すので、是が熟し腐つて枝を離れて地の底へ行つて、愈々芽の出べき時に芽が出て初め目的を達するのである、さうするとモ、此の林檎は大分うまくなつたらうと思つた、それを四五日前に取らうと思つたのを、今日来て見ればモウ腐つて仕舞つて居る、我々の手前から見ると甚だ怪しからん奴だ腐つてしまつたと言ふが、林檎其の物の方から言へば、ア、今が喰ひ頃だと人間共に言はれるのが自分の得意の時代ではない、腐つて地に落ちて手も附けられない仕様が無い、人間共に愚痴を翻す時がこちらの尤も得意の目的に近い、た時である、人間の方から見ると可愛さうに結構な林檎が腐つて氣の毒だと思ふかも知れないが、それは人間の都合を標準として言ふ話でありまし

て、林檎其の物の方では美しく熟した時が善いのもなければ腐つて落ちた時が悪いのでも無い、畢竟林檎其の物に善惡はありはせぬのを人間から見た時に善惡が出来るのである、即ち我々が人間として人間の働きを外に現はし得る上に付て、善であるといふ差別が起つて來るのであります、之を佛が菩薩本業瓔珞經といふ經文に確かに言はれた言葉があります、是は佛教の根本思想に於て大切なことでありますから一言申して置きます、其れは

隨順法性

あとに言葉がありますけれども他の言葉は用は無、即ち法性に隨順するを善と言ふ、それならば惡といふのはどう云ふ事だ、

違逆法性

法性に違逆するのが惡である、さて隨順といふは御承知の通り隨ひ順ふといふのでありまして、法性其の儘に働いて居るのが善である、又違逆といふ

のは逆ひ違ふといふのでありますから、法性に逆うて法性其の儘にゆかぬのが悪である。然らば其の法性といふは如何なることであるかといふ研究をしなければならぬことになる。是も普通世間の御寺さんなどの講釋するのと私の申すのとは或ひは多少違ふかも知れませぬけれども、其の大體に於ては私は誤らぬ積りてあります。唯々平生お寺さんなどの言はれるところては少々言葉が遠ふかも知れませぬ、それだけお断り申して置きます。一體佛教の上に於ては性といふ字を大層喧ましく言ふ性は御承知の如く生れつきといふことで、天然に具はつて居るのが性であります。此の性の上に於て佛性と法性といふことを言ふのです。どう云ふ譯て性の字の上へ佛性の法だのといふ字が附いたかといふに、凡そ世の中にあるとあらゆる物柄事柄即ち日月星辰山河草木石ても死ても其の物柄事柄の中に付て佛教の言葉では有情非情といふことを申します。其の有情と言ふたのは今の言葉で申せば動物であります。我々最上等の人間よりして下は蛆虫の如き物ま

佛性

法性

ても即ち動物、其の動物といふ上に於ては之を佛性といふ、動物が本來天然に稟け具へて居る性質といふ點から言へば、釋迦も彌陀も蛆虫も同じ性質を具へて居る此の方面から言ふと、……どの様な無智文盲の人でも……人は申すまでも無い、どのやうな淺ましき下等動物であつても、釋迦や彌陀と其本性の上に於ては少しも違ひはありませぬから之を佛性と言ふので、涅槃經には一切衆生悉有佛性と説いてあります。凡そ生とし生ける者一切皆悉く佛の性質があるといふのであります。然るに又之を法性といふときは、謂ゆる有情の動物を除いた外の物即ち非情の植物とか礦物とかいふ物の性質を法性といふ、法性といふのは一體どう云ふものかといふと、佛教では總ての物柄事柄を名けて法と申すので、一切諸法といへば宇宙萬象のことであり、それを二つに分けて色心二法と言つて、色法は形に現はれたもの、心法は總て我々の心で善いとか悪いとか憎いとか可愛いとか分別するもの、それ諸法といふた時には宇宙間ありとあらゆる物柄事柄といふこ

とに なり ます 其の 時 は 一 切 の 動 物 も 這 入 る の で あ り ます け れ ど も 今 佛 性
 法 性 と 分 け た 時 は 動 物 を 除 いた 外 の 物 の 性 質 を 法 性 と いふ の で あ り ます
 ラ ン プ で も テ ー ブ ル で も 山 で も 河 で も 木 で も 水 で も 火 で も 土 瓶 で も 何 て
 も 宜 い 其 の 物 の 性 質 其 の 物 が 其 の 物 の 性 質 に 随 つ た の が 善 て 其 の 物 が
 其 の 物 の 性 質 に 背 いた の が 惡 て 斯 う 云 ふ こ と に な る の で 前 の 林 檜 に
 善 惡 は 無 い と いふ の は 譬 喩 て は 無 い 全 く 一 つ の 例 證 て 是 更 に 例 を 申 し
 て 見 れ ば 此 處 に 一 つ の 鐵 が 有 る 或 は 銅 が 有 る 其 の 鐵 と いふ も の は 刀 に な
 る 元 來 鐵 と いふ も の 上 て は 平 等 一 味 に して 差 別 は 無 い 無 い け れ 共 今 此
 處 て 刀 と いふ も の に な つ た 時 に は 其 の 刀 と いふ も の は 一 つ の 箇 性 刀 と い
 ふ 物 の 性 質 が 天 然 に 具 は ら な け れ ば 刀 の 性 質 は ど う いふ も の か と
 いふ と 能 く 光 つ て 能 く 斬 れ る の が 刀 の 性 質 て 有 り ます 所 で す か ら 刀 と
 いふ も の が 鑄 び て 斬 れ ない こ と に な れ ば 刀 の 性 質 に 違 逆 し た の で 其 は 惡
 い 刀 て 有 り ます 刀 は 能 く 光 つ て 能 く 斬 れ る の が 刀 の 性 質 に 隨 順 し た の が

善 て 有 る の を 其 の 反 對 に 鑄 び て 斬 れ ない と いふ たら ば 惡 い 刀 と 言 は ね ば
 な り ます 其 の 然 ら ば 總 て 鐵 て 拵 へ た も の は 皆 さ う か と いふ に 此 處 に 火 箸
 が 有 る 此 の 火 箸 が 能 く 光 つ て 能 く 斬 れ る 其 は 火 箸 の 性 質 に 背 いた も の
 て そ ん な 危 險 な 火 箸 は 使 は れ ない 火 箸 の 方 て 見 ます と 古 色 蒼 然 と して
 鐵 加 減 も 有 る 如 何 に も 風 致 が 有 る だ う 握 つ て 見 て も 手 に 傷 の 附 く と いふ
 や う な こ と は 無 い 其 は 火 箸 の 法 性 に 隨 順 し た の で 有 る 其 を 反 對 に 比
 較 し 光 つ て 觸 れ ば 斬 れ る と いふ や う な 火 箸 て は 茶 の 湯 塵 敷 て 糞 取 に 添
 へ て 釜 の 環 て も 掛 け て 飾 つ て 置 か う と いふ 時 に 甚 だ 困 る ば かり て は なく
 臺 所 て も 三 どん が 使 ふ と して も 怪 我 ば かり して 居 な け れ ば なら ぬ 其 は
 火 箸 の 法 性 に 違 逆 して 居 る か ら て 有 り ます 其 て 鐵 と いふ も の 上 て は
 斬 れ る の が 善 て も な け れ ば 斬 れ ない の が 惡 て も 無 い 尤 る の が 宜 い か 鑄
 る の が 宜 い か ど つ ち も 善 く も 惡 く も 無 い 即 ち 善 惡 邪 正 是 非 曲 直 は 本 體 の 上
 に は 無 い け れ 其 其 の 物 に な つ た 限 り は 其 の 物 の 性 質 に 隨 順 する と 否 と て

天稟の本
性

善惡邪正是非曲直の分るのであります。然らば我々萬物の靈長たる人間といふものゝ人間の性質は一體どんなものでありましやうぞ、うまい物を澤山喰つて好い着物を着て人を突き轉ばしても金を多く貪ぼり甚しきは嘔吐を吐いても、間男をしても、泥坊をしても、人殺をしても、只うまい物を喰つて好い着物を着て太平樂を吐いて一生暮したら、それで宜いのでありましやうか、それが人の本來天稟の本性といふものであらうかあるまいか、是は大問題であります。是はまあ諸君手を舉げて御覽なさい、といふと表向き舉げられない人もありませうが、内所ては其れて宜しい人間の目的は其の通りといふ方に賛成の志なきにしもあらずといふ人もありませう、困つたものではありますまいか、そこで釋迦如來は人間の標準を立てられて、人間は人間の本性に隨順したのが善であり、本性に違逆したのが惡であると言はれたので、即ち人間の最上に進んで釋迦や彌陀の如き性質に隨ふたのが善人であり、釋迦や彌陀の如き性質に背いたのが惡人であるといふことになる。

善惡と迷
悟

そこで今此處で止惡修善といふ善惡もそれを標準として行かねばならぬ、我々は釋迦の如く彌陀の如き心を心とし其の行ひを行ひとして世に處する時は、初めて全く人間としての惡を止め善を修めたといふことになる。それ故に皆様も此の善惡の標準に依つて三行の止惡修善といふことを御合點あらんことを希望するのである。

偕又更にもう一段進めば、此の止惡修善といふことが更に轉迷開悟といふことになる。迷といふは我々チヨツと物の方角違ひ心得違ひをしたのも迷ひてあります。その心得違ひの程度は何處まで行くものであらうぞ、悟といふ方も其の通りのこと、ツイ氣が附かずに居たのを悟つたのも悟りだけれども、其の極點に達したのは何處かといへば、矢張り釋迦の如く彌陀の如き心と行と一致するものが出來るといふ所まで往て初めて轉迷開悟の最終の目的を達することが出來るのであります。それに付ては、止惡轉迷の規律といふものに種々様々の定りがある。又修善開悟の道法といふことも世

間にも多くありませうが、佛敎の中に最も澤山あるのであります。濟衆救世の事業といふものも澤山ありませうが、又佛敎的の事業といふものも澤山あるのでありますから、其の細目を御話して居つては、目も亦足らずでありますに依つて、委いことは御預りとして、只此の事に依つて、少く佛祖の言葉を引いて證據を擧げて御話をせねばなりません。

此の三行の御話を佛陀の經文の上から證據を擧げて申上げて置ませぬと、私が杜撰な事を言立てるやうに思召されても、自分の不本懐は勿論、諸君の御参考になる力も、薄い勘定でありますから、佛の立てられてある法則に従つて證據を擧げて御話を置いて置かうと思ひます。

佛敎と申しますものは、何時も口癖に言ひまする、八萬四千の法門、五千四百八卷の經文とか、大層の數字を並べるのでありますけれども、釋迦如來が遂に八十の歳に歿せらるゝ、實際に遺言として説かれた、經文が遺敎經と申す經文であります、其の經文の最初の處に、我は早や此世を去り、貴様達に

戒別々解説

訣れるのである、是れから後に、貴様達の師匠とするものは何であるか、波羅提木叉、是れ汝等の大師なりとある、波羅提木叉といふのは、天竺の原語で、これを支那語に翻譯しますれば、別々解説、戒といふことになるのだけれども、さう云ふ細かいことは、先づ措きまして、前に申した三聚淨戒といふことがある、其の戒といふのは、世間の言葉で言ひますれば、規則とか法律とかいふ意味で、更に之を手近く申せば、釋迦如來の學校の規則であります、凡そ釋迦如來の敎を受ける者は、必ず守らねばならぬ所の憲法であります、それを名けて戒といふ、釋迦如來があかくれなされる時に、我の亡い後は、貴様達の師匠とすべきものは、即ち此の憲法である法律であるぞ、其の外に貴様達が師とすべきものは無い、若し貴様達が此法律を守りさへしたならば、我は此の世に長く生存へ居ると、何も變りはない、我世に住すること、一切するとも之に異なることなからんと言はれた、是は餘談になりませうけれども、總て世間の事でもさうでありませうかと思ひます、政治とか法律とかいふ上から見ま

しても昔の支那の堯帝とか舜帝とかいふ人、亞米利加のワシントンといふやうな人、ア、云ふ聖人と言はれる如き人が世に天子となつて御出でなされて萬民を統御されたならば、何も不足は無、その御方の思召す所が直に天下安穩の種である仰出された所は悉く金科玉條でありますけれども、さう云ふ御方は滅多に得られない、堯舜の後に堯舜は無、ワシントンの後にワシントン程の人は矢張り得られないけれども、其のワシントンの時と同じやうに、亞米利加が長く續くことが出来るのは何であるかといへば、ワシントンといふ人の立て、置いた規則である、其の規則の支配を受けるといふことになれば、我々は或る一人の支配を受け、より安全に長く聖人の支配を受けると同様になる、然るに若しも法によらないて人に依ることになれば、如何やうな悪い天子が出るかも知らぬ、即ち支那の禹王、湯王、武王の如き人は、豪い人でもあつたらうけれども、其の子孫に幽王、桀王、紂王の如き者も出た、残念なことには、堯舜禹の如き人も所謂憲法法律といふものゝ完

全したものを立て、置かれぬから、堯舜の治世が三千年も五千年も代々續くことは出来ぬ、亞米利加の方は代々聖人が出て居る譯ではありませぬけれども、代々聖人の統御を受け、に殆ど近き幸福を合衆國民が受けることが出来て居る、それは憲法法律規則の御蔭である、釋迦如來の教も其の通り、我が亡い後は此の法律規則即ち戒を貴様達の師匠とせよ、波羅提木叉、是れ汝等が大師なり、それ此の佛教に於ては、前に申した法性に隨順すると法性に違逆するを以て善惡の標準を説いてある、彼の瓔珞經に「佛家に住在することは戒を以て本となす、即ち佛の家に住して居るといふとは戒が本である、又梵網經には戒を以て大地となすと説かれてある、どんな建築をするにも、どんな仕事をすることも、地球を地盤にしない限りは何も出来ぬ、如く我々が人の人たる所以を全うするに、其の地盤たるべきものは何であるかと云へば、即ち戒である、其の戒といふものを佛教に於ては、非常に重きを置くのであります、然るに此の戒に付て更に細かく御話することは、到

底時間がありませぬけれども極ザツと申して見ると大乘戒、小乗戒といふ差別があります、其の小乗戒といふ方になりますると大層に簡條が細かくなつて、眞言宗などが守つて居る戒は謂ゆる小乗戒と申すので、簡條が二百五十戒あります、本當に之を守るといふことは中々容易なことではない、本當に守るには第一錢金などは手に觸れることも出来ない、泥んや溜めて置くなどといふことは無論のことである、其の事に付て可笑しい話がある、私の懇意な桑田衡平といふ昔の軍醫正があります、其の人は大層佛教を厚く信ずる人で、親の法事か何かで夫の雲照律師を招待した、さうして御經を誦んてもらふたに依つて、例の如く御布施といふ者を進げた、御金を紙に包んで進げた、さうすると雲照律師が例の手に觸れられぬのでありますから受取らない、それを桑田君が非常に腹を立てた、人が志を以て布施をあげるのに其れを受取らぬなどといふ、其んな頑固な坊主があるものかといふ議論であつたけれども、そこが律師の貴いところ、實に馬鹿にむづかしいもので

あります、モウ一つ落し咄しのやうなことであります、上野の公園に淨名院といふ御寺があります、此の寺の住職が妙運律師と申しまして是も二百五十戒を持つのでナカ／＼堅い眞面目な人である、當時では坊さんと言ふたら皆悉く破戒無慚な者だと思つて御座るかも知れませぬが随分と又眞面目な人もポツ／＼あります、此人が七八年も前でありましたらうか、元と伊勢の津の殿様で藤堂和泉守といふた大名の隠居さんが歿くなられた、兼て妙運律師が御歸依であつたといふので、律師に引導して貰ふ譯になつた、何しろ三十五萬石の大名の葬式でありますから之を一つ引受けるといふと、御寺の方では大層な鯨の一つも取れたやうなもので、ザツと勘定して見ても今度の葬式は五百兩や八百兩は残るといふ考、弟子坊さんたちなどは内々喜んで居たのも有つてありまじやうが、妙運律師がそれは平に御免を蒙ります、一體佛法の上に於ては在家の者の葬式を取扱ふことは、釋迦如來が戒法の上に禁じて置かれました、今の世の中では坊さんといふものは葬

式を取扱ふのが商賣かと思つて居るかも知れませぬけれども釋迦如來は在家の葬式を取扱ふことはならぬと云ふ戒法を立て、置かれた拙僧は其規則を守るのであるから葬式は御免を蒙る御葬式の濟んだ後に法事といふこととて御経でも誦んで呉れと仰せられるならば何時でも御招待に預かる屍骸を取扱ふことは御免を蒙ると立派に劔付けて仕舞つた弟定達は指を咬へてヤア困つたナ頑固な老僧だ、少なくとも五百圓位は損をしたぞと言つたかも知らんが折角のこととて御座るから他へ御紹介だけは致さう、随分葬式屋は澤山ありますからといふので寛永寺といふ上野の徳川家の元と菩提所の御寺が今でもあります、そこへ紹介して葬式は濟ました其の後中陰の法事に招待した時には妙運律師が出掛けて行つた、葬式には無いから行つた然るに御布施に金五十圓藤堂家から出した其の五十圓の包紙に御香料と書いてあつた、そこで律師はそれを弟子達に吩付けて沈香を五十兩買はせた、此の金は香料といふのであるから決して他の物を買つてはな

らぬ、施主家で香料としてくれたのだからと言つて、トウ／＼五十兩ソツクリ沈香を買つて仕舞つた、随分新聞種にてもなりさうな話であります、斯くまで固く守る人もあります、斯様に頑固に守らなければならぬ箇條が二百五十箇條は大變六つかしいこととあります、然るに我々の信ずる佛教は其の小乗教では無い、大乘教と申します、其の方の側ではどう云ふ憲法法律があるかといふに、大乘戒の憲法と見るべきものは

三乘淨戒

三乘淨戒

第一 攝律儀戒

第二 攝善法戒

第三 攝衆生戒

此の三乘淨戒の外はありませぬ之を或ひは菩薩戒とも申します、都べて大乘佛法の各宗に於て常に授戒と申す者は皆此の三乘淨戒を授けるので、是が即ち總て我々大乘佛法を信ずる者の憲法となるのであります、私が此處

て三行と申したのは全く此の三聚淨戒であるので、其の外では無いのであります。第一に攝律儀戒此の攝の字は妙な字でございます。是は入聲の字であります。セツの音であるから下へ附く字の都合でセフと讀むのであります。耳が三つ集つて居る。是へ金扁を附けますと鑷ピンセツト即ち金て物を挟むのであります。すべて散らけて居ります物を纏める意味合の時に多く此の字を使ひます。所て攝の字は耳三つに手が附いて居りますから、手て物を搔集める意味になります。兎に角散り亂れて居るものを一つ所に集める意味がありますから、ヲサメルといふ義になつて居る。即ち律儀を聚める律儀とは總て事物に定りが附いて法律とか規律とかといふ筋のものと、禮儀とか儀式とかいふもので、必ず斯うせねばならぬア、せねばならぬといふことを律儀と言ふ。其の律儀は世の中に澤山ございまして孔子の方には禮儀三千、威儀八百、禮記などを讀んで見ても律儀はナカナカ喧ましいのであります。佛教の上には於ては前に申しました如く小乗の戒法では二百五十箇

條もある。其の他種々様々な五戒とか八戒とか十戒とかいふ箇條が澤山ある。其の他に三千威儀經といふ經文がある。朝な夕な寢るに附け起るに附け、御飯を戴くに付け着物を被るに付け、何の爲めに着るのである何の爲に喰べるのである、それらの意味が皆悉く規律立つて來るのでありますから、それらに付ての箇條を集めて説いたのであります。さう云ふものを總て集めたのが即ち攝律儀であります。それを今私は止惡轉迷の規律皆誓つて之を實行すといふやうに俗の耳に入り易い様に言ひあらはしたのであります。偕又戒といふのは悪いことをしなかつたら其れて宜いては無いかと言ふ人がありませうけれども、成程實際は宜いてもございませうが其の教の上では誓ふといふことが大切であります。必ず守りませうといふことを人間同志約束するのでは無い。即ち佛陀と約束する。モウ一つ言葉を換へて申せば宇宙の眞理と約束する。宇宙の眞理に誓を立て、必ず守りませうといふ意味になつた時に、初て戒といふ字が附いて來るのであります。我々が

總て其の爲すことの上ににそうしたら宜いは無ないかさうしはへしかつた
 ら宜いは無ないかと言いふだけでは宗教の上には許ゆるませぬ必ず誓ちかふとい
 ふ事ことが大切たいせつになるので、キツト守まもりますといふことを宇宙うちゅうの眞理しんりと約束やくそく
 する、其そのの眞理しんりの代表たいひょうとして佛陀ぶつたに約束やくそくする、其そのの佛陀ぶつたの代表たいひょうとして此處こゝに一
 人師匠にんししやうを立て、それと約束やくそくする、師匠ししやうの方ほうから能よく持もつや否いなやと問とはれた
 時ときに能よく持もつと答こたへ授あづかる受うけるといふ儀式ぎしきに掛かかつて、初はつて戒かいといふも
 のが全ぜんく成立せいりつして來きる、此この大乗戒たいじやうかいと申まをしますものは彼かの小乗戒せうじやうかいとは違ちがひ
 まして、小乗戒せうじやうかいでは事實じじつを主しゆとしますが、大乗戒たいじやうかいは理想りしやうを主しゆとするものであ
 ります、一例れいを言いひますると盜ぬすむといふとにしても物ものを盜ぬすんではならぬ、盜ぬす
 んではならぬといふことは此處こゝに斯かの水みづ瓶びんがある、之これを私わたくしが見みて實じつに結構けつこう
 な品しやである欲ほしいものだ、斯かう心こゝろに思おもふ、それはモウ大乗たいじやうでは盜ぬすんだこと
 になる心こゝろに人ひとの物ものを見みて欲ほしいと思おもうた、其そのれがモ一偷盜戒いちとうたうかいを犯とがしたので
 ある、此この事ことに就つて彼かの吳ごの季札きさつといふ人ひとが上國じやうこくへ使つかひにゆく時ときに、徐じよの國こくへ

立寄たてよつた徐じよの國こくの君きみが季札きさつの腰こしに下くだげて居ゐる刀かたなを見みて大層結構たいじやうけつこうな劍けんであ
 る、欲ほしいと思おもふた、其そのの時ときに季札きさつが心こゝろにそれそれを察さつして欲ほしいと思おもふならば
 進しんぜたいと思おもふた、心こゝろに約束やくそくしたが今は使つかひに行く途とちう中ちゆうであるから無刀むたうにな
 つて行く譯わけにはゆかぬ、歸かへりに進しんぜやうと思おもうて上國じやうこくの用事ようじをすまし、歸途きと
 に立寄たてよつて徐じよの君きみに劍けんを進しんぜやうと思おもふた所ところが折悪せあくしいことに僅わずかかの間ま
 に徐じよの君きみは死しんで仕舞しまうて、亡なき人ひととなつた、けれども心こゝろに進しんぜやうと誓ちかつ
 たものを己おのれが腰こしに下くだげて國こくへ歸かへる譯わけにはゆかぬ、遂ついにに徐じよの君きみの墓場はかばの木きへ
 劍けんを掛かけて歸かへつたといふことが、蒙まう求きうあたりにも十八史略じゅうはちしりやくにも出て居ゐると
 思おもひます、此この事ことを葛城かつらぎの慈雲律師じゆんりつしといふ人ひとが論ろんぜられた、人ひとの果報くわほうの盡つき
 るといふものは情なさけけない、徐じよの君きみは小國せうこくなりとも苟いさくも一國いこくの君主きんしゆでは無な
 いか、一國いこくの君きみたるものが他たの國こくの使者しやの腰こしに下くだげて居ゐる劍けんを見みて、それを
 欲ほしいと思おもうやうな賤いやしい心こゝろを出だすやうになつては、モ一國いこくの君きみたる果
 報くわほうは盡つきて居ゐる、其そのの人ひとの歸かへるまで居ゐられないのに不思議ふしぎは無ないと言いはれ

てあります。實に妙です。此の心の中に誓つたといふことが大層に力を持つ。其の反對に心に欲しいと思ふたのが早やモ、偷盜戒を犯して居る。此の事は耶蘇も言うて居る。人の妻を見て好い女だと思ふたのは已に姦通したのであると誠められてある。基督教も亦た此に至れば我大乘教に殆ど近い。大乘の域に侵入して居るので非常に高尚なものであります。けれども佛教ではそれは尋常の茶飯平生總てのこと心の从上から判断して行かねばならぬ。それが小乗の方ではそうでない。アレが欲しい見れば見る程欲しいと思つても、其れは小乗では未だ偷盜戒にならぬ、いよ／＼其品へ手の觸れた時始めて盜戒が成立する。已に其の罪が成立すれば其の戒が破れるに依て更に懺悔の法に依て滅罪の手段を執りませぬければ其の偷盜の罪は生々世々、生れかはり死かはりても除けぬといふのが小乗戒であります。大乘戒は心に重きを置きますから總ての悪い事は皆悉くすまいぞといふ意味が即ち攝律儀戒であります。其の悪い事をせぬといふのが何の爲かといふと、濟

大乘戒と小乘戒と

衆救世といふことが主となつて來ました。衆を救ふ爲といふことになる。街上を歩くのには左へ行けといふことになつて居るのを右へ寄つても構はぬ。正直に左へ行けば却つて人の邪魔になる。右へ寄つた方が濟衆救世に適ふといふことなれば右へ寄つても構はぬことになる。嘘を吐く、嘘も方便といふことを言ひますが、此處に至つて大に力があります。人が喧嘩をしてあの野郎とイキなり短銃を提げて驅けて行く、相手方は一生懸命逃げて行く、逃げて行く跡から短銃を持って追驅けて來た、自分はコチラの方に逃げて行つたのを現に見て居つた。今此處を斯んな奴が行きはしませぬか、どつちへ行きました、イヤ眞直………ではない。大方アツチへ行つたらうと、嘘を吐く、ハアさうですかと言つて、其の方へ追驅けて行く。是が小乗では許さぬ。人の爲にならうとなるまいと嘘を吐いたのは嘘を吐いたのだ。然るに大乘ではさうでない。己が嘘を吐いて嘘の罪を受けても構はぬ。嘘の罪で地獄へ行くのなら地獄へ行かう。人一人助けて地獄へ行くのは面白い。行きませう。斯

う云ふのでありまして釋迦が何と言はうとも彌陀は何と言はうとも構はぬ人間一人救うて喜んで地獄へ行く此の見識を以て人を救うた功德が戒を犯した罪より重ければ其方が利益が多い或は人を救ふ積りて却つて餘計害を起すかも知れませぬ何故ならばその嘘をついて逃がしてやつた奴が悪い奴であの一人の爲に多くの人が迷惑するといふやうなことになるたと言へば大變な話ださうすると己が唯々目に見て不憫だといふ事の爲に世の中に害を貽すから此に至つては大に判断に苦しむかも知れぬけれども其の目的が濟衆救世といふ標準から行きますれば大なる過ちは無い其の次に攝善法戒總て孔子の教でも耶蘇の教でも己より智慧の無い愚な者賤しい者の言うことでも善と聞いたならば必ず之を守るといふのが攝善法戒でありますそれを今私は吾人は凡そ修善開悟の道法皆誓て之を實行すと通俗に言ひあらはした此の修善開悟の道法といふことに就ては世間および出世間の有らゆる善根功德忠孝仁義の人倫道德の教を始めとし

て念佛も唱題も坐禪も觀法も諸宗各派の安心起行皆此の中に攝め盡されるのでありますから之を攝善法戒と名けるのであります其の大略は後段に於て幾分か委しく御話いたす都合になつて居ります要するところ前の攝律儀戒は都べて消極的に我々の言行を慎み少しても自から悪いと氣のついたこと又人が悪いといふほどの事ならば如何なる人の言うたことでも其れは謹んで守るやうにするのが攝律儀戒の性質である然るに次の攝善法戒は其れとは大いに様子が違つて此れは積極的に少しても自から善い事と氣のついたことは差し措かずに實行する況んや聖人君子の教は申すまでもなく設ひ如何なる微賤無學なる人の言ふことでも善いといふ善い事は必ず之を實踐躬行するのが即ち此の攝善法戒の性質である然るに斯く悪い事は決して犯さない善い事は屹と勤めるといふことは畢竟何の爲めに其うするのであるかと云ふに若しも此れが結局自分の利益の爲めてあつて悪い事をすれば詰り自分の損になる善い事をして置けば晩か

れ早かれ自分の得になるからといふやうな自分本位の行ひであつたならば決して大乘佛教の菩薩戒とは謂はれない、乃ち次の攝衆生戒が尤も大切なる要件となるのである、此の戒は又饒益有情戒といふので、有情といひ衆生といふ之を委しく申せばむづかしいことになりますけれども、衆生と翻譯しましたのは舊譯であつて、新譯では有情と翻譯してあります、即ち動物といふ意味でありますけれども、廣い意味で行きますれば草木にまでも及ぶのであります、衆といふは多くといふとて即ち多くの生物、尙廣義では世の中のあらゆる物は皆悉く色々な物が集つて出来たのでありますから、其の意味からは世の中の總ての物を衆生といふことになるので、衆に因て生じたといふ意味になるのでありますけれども、今はそこまでの話で無く狭く普通の義に依て生とし生ける動物皆悉くを攝取して利益を與へる、攝の字は彌陀如來が本願を立てられて、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨といふことが觀無量壽經にあります、其の攝取といふのは六趣四生と申

して、修羅だの餓鬼だの畜生だのと散々バラ／＼になつて氣の毒な所の生物を皆悉く寄せ集めるといふ意味で攝取といふ字が書いてある、即ち一切衆生を皆悉く安穩快樂の所へ導いて行くと云ふ意味、即ち消極的に一切の惡事を慎むのも、又積極的に一切の善根功德を積むのも皆決して自分の爲てはない、悉く一切の生とし生る者を救ふ爲にするのが攝衆生戒といふことになる、それを我々が眞理に誓ひ佛陀に約束して必ずさう致しませうとなつたので、戒の字が附いて来る、そこを三行の上では、吾人は凡そ濟衆救世の事業皆誓て之を實行すといふやうに通俗的に書いただけのことです、是が大乗教の根本主義でありまして、釋迦如來が我が無き後は我と思へよ、汝等の大師なりと言はれた戒法、其の戒法を約めて言へば三衆淨戒、其の三衆淨戒を我々が朝な夕なする事爲す事の上、實踐躬行して行くのが所謂三行でありますから、私が此處で三行と申したのは、私の私案では無い、全く佛説を通俗に言ひあらはしたまでの事であると、御承知置を願ひたい

ブルなどを讀むやうに單純には見ませぬので何か釋迦といふ人は尻口
 て物を言うやうに見える或時には有ると言ふたかと思へば或場合に無い
 と言ふ或場合には善悪も邪正も滅茶々にしてあるかと思へば或所では
 非常に善悪の差別を喧ましく言はれてある、そうかと思ひますと、どつち
 が主義であるのやら誠に分らぬやうな所もある、それで佛經を讀む人達が
 或經文を御寺の坊さんに借りて讀んで見たが、根ッからどうも詰らないも
 のであつたと考へる人もあるかと思ふと、その友達でありながらイヤ私は
 大層に六づかしいものと思つたといふ人もある、又或人は根ッからどうも
 飄蕩て餘を押へるやうな場合に捕へどころが無いと思つて居る人もあり
 ましやう、それは皆いづれも本當なので、皆嘘では無い、皆嘘ではありませぬ
 けれども、どれも其の真相を得ては居らぬ、一部分だけ見たのでありますか
 ら、彼の盲人が集つて象を撫て、見たといふ話のやうなもので、天竺の或王
 様が盲人を大勢集めて、貴様等は象といふ物を見たことがあるか、イヤ一向

撫象

盲人のことでありますから象を見ましたことはございませぬ、それならば
 貴様達が手でさぐつて見ると言うて、大きな象の頭から尻尾まで二十五六
 間もあるといふやうな大象を曳出して盲人にさぐらせた盲人は一生懸命
 にさぐりまして成程象といふものはえらい物でございませぬ、一同見たか、一
 同拜見いたしました象といふ物はどんな物だ、甲の盲人が言ふには象と申
 すものは大きな箕のやうなものでございませぬ、是は耳をさぐつた奴だ、乙は
 其の話を聞いて之は怪しからんことを言ふ、象といふものは漆桶のやうな
 ものだ、是は足だけさぐつたのだ、イヤさうでは無い象といふものは箆のや
 うなもの、御座る、それは尻尾をさぐつたのであつた、何れも皆象には違ひ
 ありませぬ、象を離れては居りませぬけれども、唯其の一部分にして全象を
 見ることは出来ない、各々耳なり、足なり、尻尾なりを見たまでのこと、決し
 て全體を見ることは出来ないから、箇様な議論が起るのである、然るに一旦
 豁然として活眼を開いて見さへすれば、全象悉く一時に見える、即ち悟の眼

が開けた時になりますれば何も釈迦様が尻口で物を言はれたのでは無い、御話に齟齬したことがあるのでは無い、或場合には耳の話をし或場合には尻尾の話をなされたのであつたといふことが明かになるのであります。之を皆さんが専門に御研究になつて居る學問などの上から證據を挙げたならば益々明かであらうと思ひますがそれは私の領分でありませぬから皆さん御勝手に御調べなすつて御覽なさるが宜しい、約めて見れば信と行との二つになるのでありますから、此處の消息が得心が行きさへしますれば、則ち總ての經文を讀んで見ましても或は演説を聽いても説教を聞いても、ハ、ア今日の話は謂ゆる三信の信の上の話である、イヤ今日のは三行の行の上の話ばかりであるからア、云ふ風に卑近な話だ、今日のは信も信本體の上の話だから絶対不變平等一味といふやうな所で、途轍も無いやうなことを言ふのである、と明かに竹を破るが如くに分ります、それを今説明して見出しの如くに約めて見ると自ら心に信ずる所、これに身に信ずる所、

いふだけのことでありますが、さて其の信といふものは如何なる姿にも互ひの心に受取るのであるかといふに、

信は高遠
行は卑近

其の信は尤も高遠なるべく、其の行は遠て卑近を要す、蓋し卑近の履踐を以て之を高遠の講究に照し、而して慚る所なく高遠の眞理を以て之を卑近の道法に應じ、而して樂む所あらば、乃ち吾人信行の要ほとんど盡きぬ、即ち心に信ずるところは此の上も無く高とたかく遠ととほく、其の高は遠さは宇宙全體と同じ分量に於て信仰が立たぬければならぬ、或一部分の上に於て何程心に安んずるところがありましても、それは本より一部分に過ぎぬので、決して本體に及ぶことは出来ないものでありますから、其の信ずるところは最も高遠で無ければならぬ、とは言ふものゝ行ひの上では、遠つて卑近を要す、遠つてといふ字に力を入れて見てもらひたい、心に信ずるところが高遠であるからというて、それを身に行ふ上にも高遠に行はうと致しますると、それは俗に謂ふ御山の大将おれ一人といふやうな驕の如く、一人

て高い／＼ときめて御天狗になつて居らぬければならぬ幾ら御天狗になつて見たからと言つて誰やらが世を避けて山に入るにも味噌醬油酒のかわひち無くてかなはじといふやうなことで飯を喰はねば腹が減る着物を脱げば寒いのでありますから實地の上に付ては必ず卑近て無ければならぬとは言ふものゝ其の卑近なることが卑近な理想を以て卑近に行ふのであつたなれば其の人は能く／＼凡庸なのでありますそれを名けて凡夫と言ふそれだからその履踐は極めて手近く卑近にしてさうして之を高遠なる講究に照す今此處で我々が寝るにもせよ起るにもせよ坐るにもせよその朝な夕な極めて手近なるする事爲す事は如何なる道理から來たのであるぞといふことが極めて高尚遠大なる真理の研究の上に照し合せて見て慚る所が無い幾ら自分の實地の仕事であると言つてもそれを高遠なる道理に照して見ると氣恥しいことが起つて來るやうなことではいかぬ手近く言ふたならば自分の朝な夕な孔子の言はれた如く君子は屋漏に

も恥ぢずて外へ出れば太陽の光を受け日月の照明に對して恥るといふことは言ふまでも無いが屋根の少しばかり破れがあつてそこから明が漏れて來るのに對しても少しも恥づかしいことは無い或は獨を慎む更に基督教などで申しても神はいまさらる所が無いといふから人間の眼にこそ見えぬ人間の耳にこそ聞えまいけれども在さる所なき神の御覽にならぬ所は無いに依て即ち我々が朝な夕なに於てする事爲す事こと／＼く神の御覽なさり御聽きなさる所に對して恥るところの無い様で無ければならぬ左ればと言つて更に其の高遠なるところの真理を其の高遠に任せて置いたのでは實地の用に立たぬのであるから高遠の真理を以て之を卑近の道徳に應ずる即ち哲學者先生達は随分高尚遠大に研究して居るけれども之を卑近の道徳に應ずるといふことは哲學といふ範圍内では無いと思つて居る様子でありますそれはどうなるかといふと別に倫理修身といふ側てあります其の側て卑近なる道徳を喧ましく言ひますけれども其の倫

理の理想といふものはどんなであるか所謂哲學者が言ふ高遠な真理であるかといへばまた其うては無い今の社會の言葉で言ふと高尚遠大なる哲學の研究の結果をそれを朝な夕なの倫理修身の上に應用が出来るやうになつて而して樂むといふことが如何にも肝要であると思ふのであります朝な夕な寝るにもせよ起るにもせよする事爲す事が高尚遠大なるところの真理に適ふ基督教で言ふやうに朝な夕なする事爲す事が神様の御目にとまつても少しも耻かしく無い神様の御耳に入れても少しも耻しいことは無いといふやうに行ひを立てゝ行かうとすると大層に苦しいそれは面白く無いそれが樂々と行はれてゆく思ふ儘に自由自在無碍圓融に行く其の儘がイツ何時でもゴツド様でも阿彌陀様でも御覽下され敢て御覽下されと言ふにも及ばぬ自分の思ふ儘にするのが知らず識らず神や佛の御心と一致するやうにさへなつたならば即ち吾人の信と云ひ行といふ所の肝要なことは此處で盡きるのであります是だけの言葉が僅か此の印

刷した冊子の上では三四行しか無いけれども此の三四行は聊か私の考だけては餘程全身に力を入れて書いた積りであり及ばずながら自分も此處を理想として出来るだけ之に依て行ふてゆきたい積りて先づ幾分なりとも行ひつゝあるのでございます是から先きは全く三信三行のこゝとを他の經文等に合せまして證據を擧げて見る考であります。

夫れ三信は是れ本體平等現相差別妙用感應の觀念便ち吾人智識の妙詣經に謂ゆる佛身法界に充滿して普ねく一切群生の前に現す緣に隨ひ感に赴きて周ねからざること無く而も常に此菩提座に處すと是なり。

前の本文の上で御話をしてある所の三信と言ふたのは何々の三つであるかと言へば第一本體は平等である第二現相は差別のものである第三其の妙用は互に持ちつ持たれつ相關聯するものであるといふことの觀念であるそこで吾人の智識の妙詣といふのは即ち御互に科學だの哲學だの色々な方法に依て學問をし智識を進めて居るけれども其の智識の妙詣妙は不

可思議に名けると言ひますから最早考へることも出来ぬければ言ふことも出来ないといふまでに到り得た場合を妙詣と言ふたのであります。本體は平等現相は差別妙用は威應の觀念この觀念より上に我々の心の働きの裏に進むべき所のあるべきはずは無い。斯う我々は信ずるのであります。是が吾人智識の妙詣でございます。其の事を釋迦如來の經文の上には如何に出で居りましやうか。此處に經といふたのは華嚴經と申す經文であります。華嚴經といふ經文は釋迦如來が初て悟を開かれた時に自分一人て其の真理を味ひ考へられた意味合を後に書留めたものが華嚴經であると申しますから極めて高尚な幽玄なものであります。其の華嚴經の中が恰かも詩の如く七言四句であります。今はのべ書きにしてありますから文の如く見えます。すけれども日本で申せば歌、天竺て之を偈と申します。支那に於ては詩といふのであります。其の偈を支那の詩の體に翻譯しましたから七言四句韻體は踏んで居ませぬけれども絶句のやうな體裁になつて居る。その第一句

が佛身法界に充滿し是だけで七言であります。佛身とは佛の身體即ち佛の身體といふものは法界に充滿して居る。此の法界といふ字も世間の人には随分誤解をして居る人があります。新聞だの雜誌などに此の法界といふ字を書き誤つたのを往々見ます。此の法界といふ字を教法社會ともいふやうな意味合に見て、近頃の法界の有様はなど、いうて坊主共の醜態などを言ひ立て、あるのを見る。然るに此の法界と云ふことは左様な意味では無い。世間で申す所の宇宙とても言ふ言葉であります。此の法の字は前回も御話ししました通り佛敎で法といふ字は所謂萬象宇宙間のあらゆる物がら事がらを總て名けて法と言ふ。其の總ての法の充ち満ちて居ります。世界のことを法界といふのであります。即ち法界と云ふは一切萬象を包容して居る宇宙界といふ意味であります。さて此の佛身とはどんなものであるかといふに一體に佛といふことは印度の原語に佛陀といふのを平生には略して佛というて居るのである。佛陀といふ原語を漢語に直譯すれば覺の

字になる。此の覺の字に悟の字を加へて覺悟といふ熟字が出来て居るが、今では覺悟といふことが本義を一轉して別の意味になつて居るけれども、其の本義は日本語にサトリといふことである。サトリといふは其の反對の迷ひの無い姿である。凡そ迷ひといふことはすべて物事の兩々相對して大小とか長短とか智愚とか貧富とか強弱とか苦樂とか昇沈とか二つ相並んだ物事は皆必ず變遷動搖する。即ち苦が樂になつたり樂が苦になつたり變動する。凡そ變動する者は眞實本統のものとは言はれぬ。乃ち其れが迷ひの姿である。謂ゆる現相の差別にばかり執着して本體の平等絶對なる眞理に體達せぬからのことである。然るに其の眞理實相たる平等本體は絶對であるから不變である。絶對であるから空間的には大小も長短もない。不變であるから時間的には起滅も消長もない。其の姿を名けてサトリといふのである。即ち佛といふはサトリといふこと。サトリといふは宇宙の眞理實相といふことである。其れ故に我々人類が差別の現相にばかり執着する迷ひの心を

棄て、能く平等眞實の本體に適ふやうになりさへすれば、其れを名けて人格的の佛といふのである。釋迦如來も彌陀如來も皆其の先覺者たる人格的の佛であるに依て、我々も亦其の跡を踐みて釋迦や彌陀に少しも異らぬところまで悟りを開かぬければならぬのである。かやうなわけであるに依て佛といふは決して別物ではない。一面から天地萬物皆ことごとく其の儘に佛である。花の開くも佛の姿であれば紅葉の散るも佛の働らきである。故に禪宗などでは佛の字に就て色々の面白い話が澤山ある。或人が如何なるが是れ佛、佛といふものはどんなものかと問ふたら、乾屎橛と答へた。是はどう云ふ物か私共は存じませぬが、支那の内地へ行つた人に聽いて見ますると、アチラで乾屎橛といふのは百姓達に必要な物ださうであります。日本では我々が排泄した不淨不潔な物は皆其の儘に跡を頼むぞ上總房州といふ話があります。葛西の兄イヤ上總房州の船頭たちがアレを持つて行つて呉れます。持つて行つた儘を直に貯へて置て肥料にする。然るに支那ではあれ

を乾燥させます、廣い所に散らして置て太陽の光で乾かして粉末にして、俵へ入れて諸方へ輸出するのださうであります、その之を乾かす時に掻き廻はす棒の事を乾屎橛といふのであります、誠にどうも早や貴い品物でございますが、如何なるが是れ佛といふ間に答へて、云く乾屎橛……言ふにも憚るけれども糞搔棒、それが即ち佛であると斯う禪宗の或祖師が答へました、又如何なるが是れ佛、汝は是れ何人ぞ、貴様は何だといふ答をした人もあります、其の他幾らもありますが、要する所佛敎で佛を説きますのに三身即ち法身報身應身の説がありまして、今此處に法界に充滿して居る佛身とありますのは、其の中の法身佛でありまして、是は宇宙萬象悉く法身佛でありまして、すから花は花、楓は楓、山は山、河は河の儘、それが其の儘法身毘盧遮那如来の御姿であります、其の佛身の御説法が猫となつてはニヤニヤと鳴き、犬となつてはワン／＼と吠える、凡そ世の中に音のある物は皆悉く毘盧遮那佛の御説法形に現はれたものは皆悉く毘盧遮那の御姿であります、私

があるとき、おもしろやちるもみぢ葉も咲く花も、のづからなる法のみすがたと詠だことがありますが、實に無限の空間に充塞し無限の時間を通貫して、宇宙平等の本體たる絶対不變の靈光といふものを、華嚴經の上では佛身法界に充滿しと言はれてある、無限だから絶対である、絶対であるから不變である、然るに其の法界に充滿して居る佛身が如何なる働きを持てるかと言へば、普ねく一切群生の前に現す、普ねくといふのでありますから、嘗に人間のみならず總ての動物宇宙間にありとあらゆる物が、事から言ふものは、ものでありますけれども、其の中から今は別して我々動物を引あげて一切群生と言つた群は、むらがる所の生物の前へ其の佛が姿がアリ／＼と現はれて來て居ります、人の姿にも猫の姿にも現はれて居る、蟲の姿にも魚の姿にも現はれて居る、其一切現象は、是は三信の上では第二の信である、宇宙平等の本體活動して萬象差別の現相と成り因縁相續して世界の果報歴然たりといふやうに一切群生の前に現するのであります、又其の次の句に、縁に隨

ひ感に赴きて周ねからざるとなく其の種々様々なる差別の姿を現はして一切群生と現はれた物が互に縁に隨ひ感に赴く即ち箇々に働きをなすのが縁で縁さへあれば直ぐにそこに働きを現はして来る感は我々の眼に物を見る耳に音を聴くが如く或は心には是非善惡を分別するといふ如き其の感の起るに隨つて周ねからざることなし互に相圓融する有様は所謂三信の中に於ては妙用の姿であります萬象の妙用各其本體を全して互に相感應するときは即ち差別の現相直に是れ平等の本體たることを確信すとは私は斯う展べて書いたのでありますけれども華嚴經に於ては之を簡單に縁に隨ひ感に赴きて周ねからざること無しと説かれてありますそれで次の第四句は而も常に此の菩提座に處すそれは一體何處に働いて御座るかといふに此の菩提座に處して居る釋迦如來三十の年に初て悟を開いた時に坐つて居つた場所を菩提座と言ひます菩提といふとは前にも話が出てあつたか知りませぬが天竺の言葉で之を支那の言葉に直しますと道とい

菩提の座

ふ字になる或は覺といふ字になる其の道の座といふたのは都べて眞正なる立脚地のことであります此の菩提座は今釋迦といふ人自ら坐つて居る立ち場そこへ佛の働きが現はれて居る其れは釋迦といふ人の仕業でありますすけれども若し諸君であれば諸君の業とし職とする上に法界に充滿する佛身が縁に隨ひ感に赴いて現はれて來ねばならぬはずでありますそれで釋迦如來は自分の立ち場たる菩提座に處すといはれたので總て其の人其の人の道とするところに佛身の働きは現はれて來るのであります

其他諸經論に眞如法性佛陀本覺涅槃等と曰ふ者皆本體の謂なり諸法緣起衆生不覺生死等と曰ふ者現相の謂なり不二融即感應始覺解脫等と曰ふ者皆妙用の謂なり

諸經論といふのは例の五千四十八卷といふやうに澤山ある其の諸經論の上には或は眞如と言ひ或は法性と言ひ或は佛陀と言ひ或は本覺と言ひ或は涅槃等といふ名が屢出て居るそれは皆宇宙平等の本體のことを言つた

のである。こゝにチヨツと圖に書きます。之を御覽下されば明かに分ります。同じ佛敎でございまして其の經文に依り或は宗旨に依て色々と言葉が違ひますけれども何れの宗旨に於ても何れの經文に據つて見ても謂ゆる三信の觀念の説明をして無いのは無いのであります。之を横に御覽下されと宜しうございます。

妙用	不二	融即	感應	始覺	解脫	周偏	中	三密	回互
現相	諸法	緣起	衆生	不覺	生死	事理	假	四曼	偏
本體	眞如	法性	佛陀	本覺	涅槃	眞空	空	六大	正

即ち本體のことを眞如と言ふた時には現相のことを諸法と言ひ妙用の事を不二と言ふ眞如は平等なもの諸法は差別なもの又差別の諸法其の儘が平等の眞如であるから不二である。不二といふことは一つといふことでは無い。一つなら一と言ふ不二といふのは二つある物がそれが別々に孤立しないといふ意味を現はす爲に不二と言ふ其の次の段は本體を法性と云へ

ば現相を緣起と言ひ妙用を融即といふ此の融の字は雪などの解ける意味であります物の形が見えなくなる有様即といふ字は即くといふ義でそれが其の儘といふ意味であります又或場合には佛陀と衆生と感應といふ三つに説くこともある同じ諸宗の中でも眞宗とか淨土宗とかいふ宗旨では本體のことを常に佛陀といふ即ち阿彌陀如來であります又現相に於ては我々に最も親しき所の一切有情の物を擧げて來て衆生と言ふ衆生といふのは差別のものであるが佛陀といへば平等のものであります其の佛陀が其の衆生を助けやうとして感應した時に妙用が現はれる又起信論といふ書物の上では本體の事を本覺と言つて現相のことを不覺妙用の事を始覺と云つて居る又涅槃經の上では本體のことを涅槃と言ひ現相の事を生死と言ひ妙用のことを解脫というてあります是からあとの四つは同じ佛敎諸宗の中でも四箇の大乘と申しまして華嚴宗と天台宗と眞言宗と禪宗この四宗は最も高尚な宗旨でありますから其の四つの宗旨だけは其の専門

語を取つて來たので即ち華嚴宗では本體を真空と云ひ現相を事理と云ひ妙用を周偏と云ふ又天台宗では此の三つのことを空假中といふ是は天台宗の宗旨の立方で本體の平等なる有様を空諦と言ひ現相の差別の有様を假諦と言ひ或は空の儘が假であるといふやうに互に融通するところを中諦と言ひます其の次の六大四曼三密といふのは眞言宗の教相であります眞言宗では本體を六大と言ひます六つの大きな物といふことであります今の學問の言葉で言つたなら六大元素と言つても宜いのでそれが本體でありますその六大が現相となつた時には四曼と申して四通りの曼陀羅といふ形が出来上つて來るそれから三密と申して身に行ふこと意に思ふこと口に言ふこと此三つは密着の關係を離れないので即ち妙用であります次に禪宗では本體のことを正位と言ひ差別のことを偏位と言ひ更に其の正と偏とが互に持ちつ持たれつ關係して居る所を同互と申します其れを今

華嚴宗の真空事理周偏天台宗の空假中眞言宗の六大四曼三密禪宗の正偏同互等皆悉く體相用の通義に出る者なし大なる哉三信の法門やと申して置きました何れも悉く三信を離れて外に宗義は無いのであります是は何處にても通ずる義理合てありますから通義である此の外に何にも理窟のあるものには無い大なる哉三信の法門やて能く研究して見ると本體現相妙用といふ簡單な言葉ではありますけれども此の三信の法門の中へ五千四十八卷の經文も八萬四千の法門も乃至世の中にとあらゆる事がら物から皆悉く皆隨らぬものは無いのであります

又夫れ三行は止惡修善濟衆の運爲便ち吾人徳行の權致經に謂ゆる諸惡は作す莫れ諸善は奉行せよ自ら其意を淨くす是れ諸佛の教と是なり是れが前の本文の所で一通り御話いたしたのでございますから今更練返すに及びませぬが三行といふことは止惡修善と濟衆の運動行爲であります我々の道徳といふものには色々程度がございまして淺いもあ

り深いもあり狭いもあり廣いもございませうけれども此の三行と申しま
 することに至つては、モウ我々が人間としての道徳行爲の極致に至つたも
 のだと斯う私共は信ずるのであります其の事を經文の上に證據を取つて
 見ますれば是は阿含經と申す經文其の他の經文にもございませうけれど
 も、多く人の知つて居りますのは阿含經と申す經文の言葉でございませう、
 諸惡莫作、諸善奉行、自淨其意、是諸佛敎とございませう、諸惡は作す莫れ總て世
 の中の悪いといふ悪い事は皆いたさないうやうにしなければならぬ、諸善は
 奉行せよ、總ての善い事は皆自分の身に引受けて履行せぬければならぬ、其
 の上に自ら其意を淨くする、是も淺い深いは種々の程度もございませうが、
 自分と自分の意が淨く清潔になるといふのは何かといふと心に遺憾と思
 ふことが無い、苦しいと思ふことが無い、その遺憾に思ひ苦しく思ふといふ
 のは何であるかと言ひませうれば極めて手近き所で我々自分一人だけは何
 うなりとも諦めもしませう、自分一人だけはどうか安心しても居りませうが、

親や兄弟其の他手近い家内眷族等の上に苦しみがある、心配があるといふ
 ことでありますれば、どうも自分も安心が出来ない勘定になる、我々の五人
 や八人の家庭の上に於てさへも、我一人ならば何も心配は無いがと思ふ所
 が諸君は未だ家を成さぬ御方であれば餘り御經驗も無いでせうが、是より
 家を成して見たならば必ず其の經驗をせねばならぬことになる、僅か自分
 の妻子眷族でさへ其の通りの事でありませうから例に引くも恐入つた事
 ではあるけれども一天萬乗の君たる天子様には我日本だけでも五千餘
 萬の人民を統御して下さるといふ上に付ての御心配といふものは一方な
 らぬのでございませう、況や一切衆生を皆悉く實子の如く思はるゝ佛の御
 心になつて見ましたならば、一切衆生總ての者に安穩快樂を與へて初て自
 分が安心することになるのであります其の安心の場合を理想とし目的と
 して行くのでありますから自ら其の意を淨くするといふことが三行の中
 では濟衆救濟の事業を皆悉く實行し終つた時で無ければ自ら其の意が十

分に淨く成り切るといふことは出来ぬ勘定になる。此の如く諸惡莫作と諸善奉行と自淨其意との三つが是が即ち諸佛の敎である。夫の唐朝の時代に名高い白樂天あの人が若い時に鳥窠禪師といふ禪宗の坊さんに佛敎の大意を問ふた。其の頃には白樂天はまだ佛法の何物なるを知らなかつた。後には大層な佛敎信者となりましたので、白氏文集を一たび披けて御覽なされば分るのでありますけれども、日本の菅丞相の書かれました菅家文章を讀むと同じやうな心持がしますので、どの文章でもどの詩でも佛敎臭く無いのは殆ど無いやうになつて居ります。然るに最初白樂天も唯々一通りの儒者でありますから、鳥窠禪師に問ふた時に、如何なるか是れ佛敎の大意といふ間に對して、禪師は諸惡莫作、諸善奉行と答へました。何でも悪い事をしなくてはならぬ善い事はせねばならぬと答へた。白樂天せうら笑つて三歳の童兒も尙能く之を言ふ、そんな事は三つの子供でも言うては無いか、佛法といふものはモ一少し高尚な氣の利いたものかと思つたら悪い事をしてはな

らぬ善い事をしる。餘りに馬鹿々々しい平凡なものである。赤ん坊でもそれ位のことは言ふと申した時に、禪師曰く三歳の童兒尙能く之を言ふ、八十の老翁も尙之を行ふこと難しと唯だ言うだけの事ならば誰でも如何なる事でも言ふけれども、實地に行ふといふことになつてはナカナカ容易なことでは無い、さすがに白樂天はアレ程の大人物でありますから、此一言に大に反省して初て實地の修行をする氣になつたといふ。白樂天履歷中の名高い話であります。其の時の問答が即ち阿含經の語で即ち此の諸惡莫作、諸善奉行の二句であります。

其の他諸經論の攝律儀戒と曰ひ、斷德波羅蜜と曰ふ、皆止惡の謂なり。五戒十善等の一切律儀及び世間の防非斥邪諸法律等皆此の中に攝む。攝善法戒と曰ひ、智德波羅蜜と曰ふ、皆修善の謂なり。忍辱精進禪定念佛唱誦講咒等及び世間善倫の敎誨皆此の中に攝む。攝衆生戒と曰ひ、恩德波羅蜜と曰ふ、皆濟衆の謂なり。布施愛語利行同事四恩八福田等及び世間博愛慈善の

事業皆此の中に攝む

攝律儀戒の御話の前に三聚淨戒のところて御話いたしてあつた即ち世の中の總ての法律規則等は皆悉く三行の中の止惡といふ部分に攝まるのであるといふことを御話いたして置いた又涅槃經といふ經文には三德波羅蜜といふことを説かれてある其の中の斷德波羅蜜といふのが即ち止惡の意味で斷といふのは物を斷ち切るといふ事でありますから御醫者の事て言つたら病の原因即ち病因を悉く斷滅してしまふ上に現はれる働きを斷德波羅蜜と言ふのであります波羅蜜といふのは原語で支那の言葉に到彼岸向側に行くといふこととあります不健康なる此の岸の病人が健康なる彼の岸に行き果せることを波羅蜜と言ふ貧しき物が富み馬鹿な者が伶俐になる迷うて居る者が悟る皆現在の立場即ち劣れる此の岸より進んで勝れたる彼の岸の立派な所へ行き果せることを波羅蜜と言ふのであります今はその迷の本の斷つから斷德波羅蜜と言ふので總て世の中の惡いとい

斷波羅蜜

ふ惡い事を悉く斷切るのてありますから斷德波羅蜜と申すので是は皆止惡の意味であります

そこで佛教ては又惡い事をしてはならぬといふ箇條が澤山ありますのであります但其の中て一番に箇條の少いのが五通りの法律があるそれを五戒と申し又更に倍にいたして十善戒といふ十箇條立つたのがある其外にも色々の箇條があるのを今は皆攝めてありますから等といふ字を置いたのであります一體に大乘佛教を信じ且つ行ふ者すなはち我々互ひも皆菩薩の一部分でありますが凡そ菩薩たる者の行ひの標準を六箇條立てられてある其れを六波羅蜜といふ波羅蜜といふことは前に申した通り現在の不完全なる立場から進んで完全たる彼岸に到達する即ち到彼岸の目的を達する方法を六箇條立てられたのが謂ゆる六波羅蜜である其の第一の檀那波羅蜜といふのは後の攝衆生戒に必要なこととあり第二の尸羅波羅蜜といふのが今此の攝律儀戒の骨目である又其の次の第三層提波羅蜜忍辱

と第四毘梨耶波羅蜜(精進)との二つは次の攝善法戒の肝要である。さて其の中に今こゝて言ひかけた戒法のこと即ち尸羅波羅蜜といふのは尸羅は梵語これを漢譯すれば持戒となる。持戒といふは讀て字の如く持はタモツ戒は誠と通じてイマシメといふ義。都べての規律を能く堅く守りて露ばかりも違ふことなく各自其の職分を行つてゆけばそれが直に佛の説かれたる持戒の道に適ふのである。此事も天地萬物の真理の上に當倣て往くと、天地萬物の真理其儘が持戒の道に適うてをるのである。譬へば春になれば花が咲き秋になれば紅葉が散り夏は暑く冬は寒く雨は縦に降り風は横に吹くと云ふ様に、いつてもチャンと定つて居て彼等は少しも此規則に違ふことはありませぬ。今日の雨は珍らしく上の方へ降るなどと云ふことは決してない。雨は必ず上から下に降るものと定つてをる。又彼の太陽などは尤も規則正しいもので我々の方からは厭な天氣だとか曇つた天氣だとか云うて居るけれども、其の實太陽自身は照り通しに照つてをるので、少しも其職分

に違ふたことはないのである。又柱は縦に梁は横に天井は上に床は下に各其職分を嚴重に守つてをるから家屋が安全なる譯である。若し是等の物が少しにても法律を犯したならば、連も吾々は家の中に住んでをることは出来ない。柱が勝手に横に臥たり梁が眞直に立たりすると、大變なことが出来する。天地萬物は總て皆是の如き道理のものであるから、今一々は申しませんが、之に由て考へたならば、大凡そ持戒の義は御了解になるであらう。さて又晉に佛敎の上の事ばかりでは無い、及び世間の防非斥邪云々、此の世間といふ中には他の基督教にもせよ、マホメット敎にもせよ、儒敎にもせよ、道教にもせよ、それらのものも皆入れてあります。何れの宗教にしても悪いことは防ぎ邪まなことは斥ける。其の他國家の法律諸規則の如き事までも、皆此の止惡の中へ入れてありますから、皆此の中に攝むと申したのであります。それから又第二の行の攝善法戒といふのは、三聚淨戒の第二で、前の攝律儀戒が消極的に惡を止めるとは違ひ、是は更に積極的に善事を勧めるのであ

ります。さて又智德波羅蜜といふのは前の斷德波羅蜜と並び交して涅槃三德の一であります。智は智識の智で總て物の道理を能く分別して考へるのが智であります。其の分別の極度といふものは宇宙の眞善美を明かに全く現はす所まで行くのであります。之を智德波羅蜜と曰ふ斯様に言ふたのが即ち三行の中の修善といふことが經文の上に現はれて居るのであります。すから皆修善の謂なりと申しました。忍辱波羅蜜といふことは謂ゆる六波羅蜜の第三層提といふ梵語を忍辱と譯する。忍はシノブ辱はハツカシメ。即ち如何なる耻辱をも能く耐え忍ぶのが忍辱の義であります。そこで釋尊は之に就て此の世界に面白い名をつけて置かれた。即ち此の世界のことを婆といふ。婆婆といふのも印度の原語で漢譯すれば堪忍といふことになる。實に此の世の中は何事も皆自分の思ふやうには往かぬ都べて互ひに堪忍をし辛棒をしなければ一日も生きて居ることも出来ぬ故に堪忍が何より肝要である。尤も此の世界を堪忍世界と名けられたのはお釋迦様以前か

らのことでもあらうけれども、我々は佛教の感化に依て此の世界は堪忍を以て大切とすべきことを知つたのである。さて右申した通り忍の字は忍び耐えること。下の辱の字は漢音で讀めば辱即ち耻辱と云ふこと。此の耻辱を忍ぶと云ふことが最も大切なることになるのであります。實に天地萬物は悉く皆な忍辱の道理に依て成立つてをるものである。彼の太陽を御覽なさい。どんなことがあつても決して腹を立てることなく、いつても同じ様に其の職分を盡してをる。又彼の花を御覽なさい。あの花は大層立派だと褒めるから咲くのもなく、厭な花だと誇るから散る譯でもない。人が褒めても褒めなくても、人が見ても見なくても咲くべき時が来れば花は咲き散るべき時が来れば花は散る。そうして人の心を樂しむるのが總て花の持前である。又人間の上に就て忍辱の例證を挙げれば古來の歴史にいくらもありますが、皆様も歴史を讀んで御承知の如く春秋戰國の世に趙と云ふ國がありました。彼の國は小さい國で、其の隣國に秦と云ふ大國がございました。秦は國が大きく

且つ傲慢であつた趙は小國であるが趙氏連城の壁と云ふ貴い寶物を持つて
 をる秦國の王がそれを知つて居てどうか其壁を欲いと兼て望てをるが、い
 くら欲いと云うても人の國の寶物を強奪する譯には往かんからいろ／＼考
 へた末遂に欺して奪らうと云ふ一策を案じて使を趙の國に遣はして曰ふ
 には貴國の寶物なる彼の連城の壁を當方によこしたならば其の代りとし
 て十五城の領分を與らうと申送つた、たゞ坐つて居て十五城と云ふ大な領
 分が貰へるのであるから、こんな甘ひ話はないけれども秦と云ふ國は元來
 暴虐無道にして、詐僞虚喝至らざるなしと云ふ有様であるから趙の國ても
 大に考へた、本當の十五城を渡すならば壁位は與つても宜いが彼らの言ふ
 ことはどうも當にならん、うつかりすると壁は取上げて置いて城は渡さん
 と云ふに違ひない、さうかと云つて若し其申込を拒んだならばどんな剛い
 目に逢ふかも知れぬと、秦の國の強大なるに恐れて遂に其申込を承諾し、此
 方から壁を興る代りに彼方から十五城を貰ふことに評議一決したが、さて

其の使に立つ者を餘程擇ばなければならぬ、誰れが宜からう彼れが宜から
 うと云ふことになる、其の時趙の國に蔣相如と云ふ賢い人があつた、誰れ
 彼れと云はんより私が其の使に參らう、私が使に參る以上は彼方て城を
 渡せば好し、若しも渡さぬならば必ず壁を完たうして歸りますからどうぞ
 私をお遣り下さいと申出た、此の蔣相如は武官ではなく文官で有つた、そ
 て蔣相如が選ばれて秦の國に使者に參りました、彼國に到着して秦の王に
 謁見を爲し、使の口上を述べて壁を渡した所が秦の王が壁を受取つた限り
 て、少しも城を渡さうと言はぬ、固より始めから城を渡す積りてないのであ
 るから、何んとも言はんはづである、蔣相如は果して詐騙の手段に罹つたと
 思ふたが、此の場合に於ては如何ともすることが出来ない、彼方は警衛充分
 に整うてをるに、此方は單身の使者であるから、逆も腕力を以て壁を取返す
 ことは出来ぬ、壁を取返すことが出来ず、亦城を受取るとも出来なければ、
 逆も生きて趙の國に歸ることが出来ない、サテ斯う云ふ場合に臨んでは本

當に命懸の仕事である。此時蔣相如は一計を案出して巧みに秦王を欺いた。何んと言うて欺いたかと云ば今閣下に差上げた壁は趙の國傳來の此上無寶物で御座ますが、實は此壁に少々瑕がございます。其の瑕は一寸御覽になつた位ではなか／＼見出すことは出来ないが、私は其の瑕を能く存じてをる。今後それが閣下の御所有物となるに就ては、其の瑕の在る所も御承知になる方が宜からうから一寸お貸し下されお教へ申さうと、至つて手輕に申した。そこで秦王何んの氣なしに、それなら一寸教へて呉よと、其の壁を蔣相如に渡すと、蔣相如大喝一聲十五城をどうすると、秦の君臣を罵倒して、遂に恙なく趙の國へ歸つて來ました。蔣相如あつたが爲めに能く秦の欺きを防ぎ、且つ亦國の寶物を完うしたのであるから、趙王大に其功を嘉して、蔣相如を擢用して上卿となし、諸官員の一番上席を占めさせた。そうすると今度は趙の國の軍人に強い奴が一人を、即ち廉頗將軍と云ふ武勳赫々たる強い人であつたが、此の頃、蔣相如が登用せられて、已れの右に出るを見て、

大に心善からず思ひ人に不平を洩して曰ふには、彼の蔣相如と云ふ奴は何者だ、元來賤い身分の奴であるに、僅かに口舌の上で功を立てたからとて、我々命懸に働いて攻城野戰の大功を立てた者の上に坐らせるは、實に其意を得んことである。一體王も王だが、野郎も野郎だ、餘りくそいまいしいから、野郎見付けたら、強く辱めてやらうと、廉頗將軍大不平で蔣相如を見付け次第、擲り付けてやると云ふ勢であつた。所が蔣相如竊に此事を聞いて用心を爲し、朝廷に出る時は常に病氣だと唱へて人よりも後れて出る様にしてをるから、つひぞ廉頗と一緒にならない。廉頗は之を見て、彼奴なか／＼の横着者だ、己れに會ふのを畏れて、始終避匿してをるナと思ふたが、會はんものがあるからどうすることも出来ず、空しく腕を扼して、期の至るを待構へてをつた。そうしてをる中に、或時折悪しくも途中で出會して、蔣相如が車に乗つて此方から往くと、彼方から廉頗の車がやつて來る。蔣相如が不圖其車の影を見るや、否や忽ち逃げ出して、他路に入つて仕舞つた。蔣相如は素より心に